

30

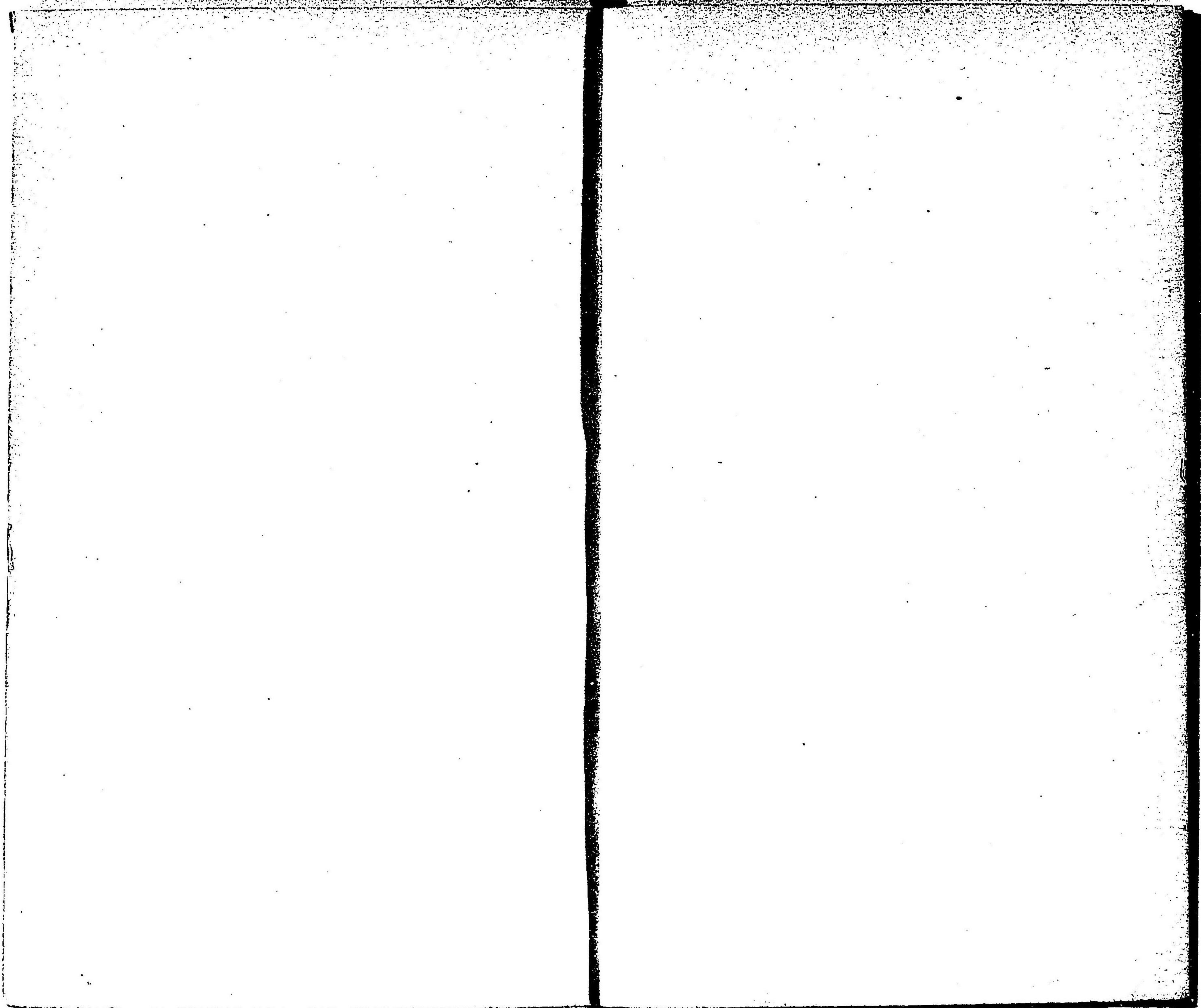
191

最近海外文學

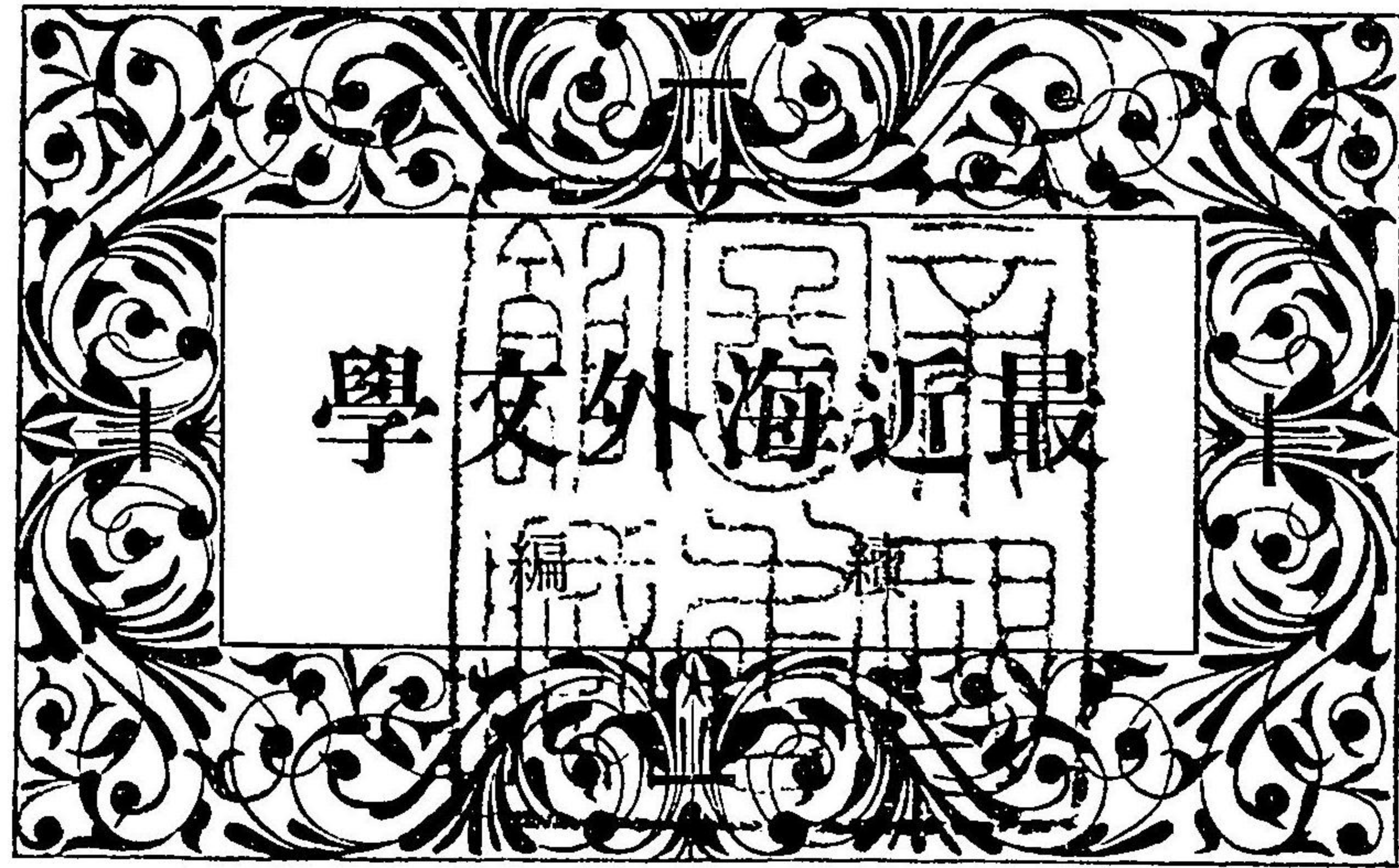
編 續

文學士 上田 敏 著

東京 文友館 藏版



30-191



著 敏 田 上 士 學 文



版 藏 館 友 文 京 東

## 最近海外文學續編目次

マアクト、トエイン	一
ダヌタン男爵夫人の小説	四
伊太利亞の新作家	六
現今の伊太利亞文學	一〇
ホアキン、ミラア全集	一三
テニソンと羅甸文學	一七
虞翁の著書	二〇
佛蘭西の新劇	二三
人生の批評	二六
歴史小説	二八
サリヤム、ブラック	三一

キップリングの新著	三三
佛文近著	三六
筆資萬貫	三八
キップリングの新作	三九
アストンの日本文学史	四一
文字のしるべ	四四
畫家ハアン、ショウンズ	五〇
文藝瑣話	五四
英國小説史	六九
大英人名辭書	七三
近著數篇	七四
ラスキン略譜	八〇

英辭書の古今	八四
批評家の任務(ブラシダア、マシウ)	九七
フリードリッヒ、ニイチエ(リヒテンベルゲル)	一一六
悲哀(エルハアレン)	一二八

最近海外文學續編目次終

最近海外文學續篇

文學士 上田 敏 著

マーク・トウェイン Mark Twain



マーク・トウェイン(實はサミュエル・ランゴオン・クレメンズ、一八三五生)は今の米國文壇に於ける巨人にして、盛名夙に英國に傳り、延て歐洲大陸に及びぬ。觀察の鋭利、滑稽の豊富、又文脈の磊落奇聳なるを以て既に文學中に地位を占めたるが如し。先年故ありて債を負ひ、これが償還の爲め英米を歴遊して、講演を開き傍ら小説雜著を物したるに、著作毎に盛大の賞賛を博して巨利を得たり。「漫遊記」の一篇は英國殖民地の

觀察録にして、印度濠州の事情形勢を初とし、南阿トランスプアルの風雲に至る迄透明の筆に描出せられたり。彼はセシル、ロウズの人物を高しとせき、まかも其勢力の偉なるを賞し、シドニーに遊で、其市街の米國風なるに驚き、メルボオンに進で益々其然るを覺ゆ。印度に至ては帝國征討の大業を賞嘆して、英人の秩序を保ち規律に遵ふ美風に服す。其他機智を弄し、諷刺を逞うして英人の弱處を穿つと共に、英人が骨を異域に暴らす豪壯の精神を有しながら、尙ほ故國の俗を守り、景を忘れざる望郷の情を述べたる時、文意共に揚れるを見る、曰く人は瑞西の美を賞す、而も之をアラスカに求むること難からず。人は又北米平野の景を賞す、而も之を濠州に求めて得可し。布哇群島の麗明なるも亦他の大平洋上の島嶼に繰返されたり。獨り英國の風光は如何にぞや。綠草と曇天と泉流と、これ其全景なり。されど英人は異域の壯觀を眼

にしながら、夢寐これを憶ひて浩蕩のかなたに在る邦を忘れざるなりと、全篇斯の如き筆路に充ちたるマークトウェインが此新著述は眞に現時の英人を悦ばすに足るものあらむ。大英主義の鼓吹は實に最近英文學の一大勢力たり。而して其代表者として文壇の覇を稱するキップリングも亦暫時の閑暇を得て今回南阿非利加に漫遊を試みむとすといへば、歸來彼の詩囊より壯大の雄篇に接するを得べきか。

(補遺) Mark Twain は文學の號なり。眞の名を Samuel Langhorne Clemens

といふ。千八百三十五年十一月三十日北米ミズウリ州フロリダに生れ、諸州を遍歴して、冒險の閱歷を経、重にミシシッピ河上の生活に明なり。其文號の如きは此河の按針が錨綱一尋を稱して mark twain としふに基けり。The Innocents Abroad, A Trump Abroad 等は歐州漫遊の記にして Adventures of Tom Sawyer, Missisippi Sketches

等は壯年の追憶を加へて與あり。其他 The Prince and the Pauper; The Yankee at the Court of King Arthur; The American Claimant; The Personal Recollections of Joan of Arc の著あり。

### ダヌタン男爵夫人の小説

本邦駐劄白耳義國全權公使の室にして、帝都交際場裏の光彩たるダヌタン男爵夫人 Baronesse D'Anelhan は今回一篇の小説を著して歐洲の文學雜誌に賞賛せられたり。題して "His Chief's Wife" といひ英語を以てす。佛語は今日白耳義の國語なれども、夫人は元來白耳義の生に非らずして、純粹の英人なればなり。而も實に夫人は有名なる英國小説家ハッカアド氏の令妹なれば、文才ある亦怪むに足らざれど其文脈と題材とは甚だ兄と相違す。ハッカアド氏は "She", "King Solomon's Mine" の

作に、超自然にして變幻極みなき脚色を組織したるにダヌタン夫人は之に反して題材を其閱歴したる社會に採り、外交界裡或は高貴縉紳の消息を傳へたり。文脈は流麗にして直截の妙あり。内容は歐洲小説の常として戀愛の譚なり。而して篇中人物の會話は教育ある英人社會の語法を誠實に描寫したるものなれば、英國現今の上流社會に行はるゝ談話を學ばむとする者に對して、最良の模範たり。因に云ふ、多くの人は此小説家にして又小説家の妹なるダヌタン男爵夫人の外にも尙ほ一奇談あるを知らざる可し。そは前々英公使の室、フレイザア夫人が有名なる小説家マリオンクロフォード氏の妹にして自らも亦數篇の小説を著し又雜誌の爲に筆を執りし事なり。實にフレイザア夫人及びダヌタン夫人の例を以て考ふるに歐洲の諸國は其伶俐なる婦人を以て吾邦に派遣したるものゝ如し。



## 伊太利亞の新作家

伊太利亞は文藝復興の先驅にして、往昔全歐美術の指導者となり、ダンテ、ペトラルカ、ボッカッチオの三星相踵て諸邦の詩文を感化し、タッソ、アリオストの燦爛たる叙事詩も、亦後世の騷人に影響せし所少からざりしも、近世に及で、昔日の風格漸く廢頽し、政治産業の衰運と共に、往年の英氣復見る可からず、文藝の學者もまたフリカヤどもに、嗚哀い哉伊太亞利の邦と喟歎せざるを得ず。然るをマンツォニに歴史小説の新聲を聞き、レオバルディに厭世觀の鼓吹を耳にして、稍々人意を強うする趣ありきと雖も、これまた暫くにして消滅しぬ。

此間歐州の文運は、日を追て擴大せられ、又延長せられ、英國文學の精華十九世紀の初半に煥發してより、爾後國母王朝の御宇に至るも、寸毫の

停滯を見ず、ブラウニング、テニソン、スピンバアン、ロセッティの四名家より、#リヤム、セリス、キップリング等の詩客ありてよく白聖島國の令聲を保持したり。佛國はまたユウゴオミニッセエの後、所謂 Parnassiens の詩社興て Decadents の新聲を生じ、ルコント、ドゥリイル、ホセ、マリヤ、ドゥ、エレディヤの完美なる詩格、エ、レニエ派の幽婉縹渺たる新體又小説界に於ては、モオバッサン、ロテ、等他邦人の決して模倣すること能はざる短篇等は、優に歐州文壇の覇を稱するに足る。獨逸はまた近年に至り、Sudermann, Hauptmann 等の大戯曲家を出して、北歐那威瑞典の詩人をも凌駕せむとする風潮あり。露西亞は曩に Eugeneft, Tolstoi 等の傑著を生じて餘威未だ衰へむとする姿無し。獨り南歐羅甸人種今日の文學は終に他邦のそれと駢馳する能はずして、近年西班牙の詩人 José Echegaray ありて稍々名聲を大陸に振ひしのみ。而して伊太利亞も永く沈黙の裡に没

せし如きの際し、青春奔放の一作家忽然として歐州の騷壇に上りしは、實に快心の報ならずや。其名をガブリエレ・ダンマンチオ Gabriele D'Annunzio とす。

初めてダンマンチオを全歐の文壇に紹介せしは、現今佛國の評壇に名ある Melchior de Vogüé (Feb. 25, 1843) の業なり。ヂギエは曩に「露國小説」と題する犀利の評論を物して Dostoevsky, Turgenieff 等の名作を佛人に紹介せし人なるが、今また南歐同人種の作家を揚げて衆目の中心たらしめしは、實に文學に忠なりと謂ふ可し。ダンマンチオは詩人にして又小説家なり。初め清楚なる一小詩卷を著して、羅馬の文壇に問ひしが、毫も其願盼を得るなくして己みぬ。爾後力を小説に傾倒し、近世的思想の咀嚼と鼓吹とに精神を用ゐて、自ら一家の文を爲しぬ。ダンマンチオの文、音調優美にして措辭典雅なるは、古伊太利亞文の傳統

を因襲して謬無く加ふるに複雑なる近世的思想の委曲を盡して、毫も遺憾無きは讀者の驚歎する所なり。熱烈にして奔放なるはナポリの入江にエス井オの雲映じたる如く、清妍にして玲瓏なることはミラノの夏にアルピ山の雪を望む如く、濃艶の調を逞うして熱情の極を叙するに至ても、なほトスカンの雅醇を失はざるなり。著す所 *Vergini delle Pance II Trionfo della Morte* 等、佛に英に譯せられて今頗る文壇を動かすのあり。之を要するにダンマンチオは現代の名家中、最も世界的なる者にして其作品に近歐諸國の文學を反映し、思潮を漂泛し、此の如くして得たる諸種の幻象を自家獨創の心理的透察の上に點綴したるが如し。フロオベエル、ゾラの寫實派、ドストイエフスキイ、トルストイの心理派、又イプセン、ヒュイスマンスの感化を見る可く、ゴンクウルの影響歴々たり。伊太利亞は此新進作家の爲、再び歐州文壇の一方に雄を稱

することを得べきか。かれ尙春秋に富み、其造詣する所未だ推知すべきにあらざれば、われら刮目して其前途を待たむのみ。輓近思想の交通親密に赴きてより諸民族の特性を發揮して世界の思潮に貢獻するもの多し。曩にケルト思想復興の事あり、今亦騷壇に新羅甸運動の業なからむや。然らばダンヌンチオの如き其劈祖たる者なり。

### 現今の伊太利亞文學

南歐文學の近況は大陸評壇の視聽を動かし來り、殊に近來 *D'Annunzio* の出現に因て注意を惹起したれど、伊太利亞の本國に於ては未だ燦然たる文運の勃興を見る能はざるに似たり。佛蘭西の評家にして世界的評眼あるを以て有名なる *ワヰグワ* *Wigwa* が今の伊太利亞文學を品隲したる論文載せて昨冬十二月の「兩世界評論」に在り。言に曰く、伊太利亞

の民は翹首して所謂「羅甸文藝復興」の重來を望みつゝ、われど、現今の文運はなほ此熱望を醫するに足らず。或は伊太利亞語の改造を以て、良策と爲し、あるは、外國文藝の影響を脱却するを以て、急務と信するが如く、各其所信を實行して一代の隆盛を恣まにせむと欲す。而して茲に奇とすべきはダンヌンチオの如き曠世の作家を賞揚せずして、暗に其伊太利亞風ならざるを厭ふ如きさまある事なり。羅甸民族の天才を發揮して大陸の文壇を風靡したる此作家も、其生國の評家より見れば多少の文才を有するも、終に非國民的文士たるを免れざるなり。人は彼を *Fogazzaro* に比し *Verga* に倣らへ又 *ペトラルカ*、*マンツォニ* と並稱すべき伊太利亞民族真正の精神を傳へたる作家と爲さず。然れども伊太利亞、今日の文運未だ草昧に屬するが故に新奇の機軸を案出し、異様の主義を應用せむとする幾群の文士に富めり。時なほ過

渡の期にあれどアルビ嶺南の文藝終に失望すべからざるなり。而して現時最も勢力ある文學は、大概ロムブロッツ Lombroso 一派の刑法人類學を應用したる小説類にして、現に先年の佳作と稱せらるゝうち半は皆社會學、心理學、又人類學の結果を敷衍して人情の域に推及したるものなり。是に於てダンヌンチオの蹤を履む者は、獨逸の哲學者ニイチエ Nietzsche の風を帯び、又フアエラフェライト派の趣あり。ロムブロッツの説を奉ずるものは、擧て刑法人類學の圈中に踞蹠たり。

佛の Revue des Deux Mondes に對して、伊太利亞に Nuova Antologia と云ふ雜誌あり。評家ドメニコ、オリブも先年の同誌上に於て現今の伊太利文學を評し、近時の作品を貶して曰く、是等の文學は健勁を欠き、圓熟を欠き、又獨創の氣を欠けり。これ偏に先進の大家持重して製作に従事せざるに因る。フォガザロ（一八四二生）は默し、エルカ（一八四〇生）は作らず。餘の群小作家何ぞ云ふに足らむやと。然らば則ち、羅甸文藝復興も未だ近年のうちにあらざるべきか。吾等の獨り囑望するはガブリエレ、ダンヌンチオの天才なり。

### ホアキン、ミラア全集

西大陸の詩人シエラの歌者として有名なるホアキン、ミラア Joaquin Miller は千八百四十一年十一月十日インディヤナ州の一隅に生る。實名を Cincinnati Heine Miller とす。狀師として嘗て墨西其の一山賊を辨護せしより其名を以て雅號とせり。千八百五十九年始めて其詩を公にし、爾後始て四拾年、今茲に其詩歌の全集を見るに至りぬ。序に曰く詩に屬するものと、焰に投ずべきものとを判定するは著者の權にあり。篇中の詩歌は皆吾が自ら選擇に係れり。又曰く秀たる花は皆

地に近く咲けり。吾等歌人また徒らに雄大なる題材をのみ望まざるこそよけれ。吾が志す所は Heart なりと。

集中収むる所 The Isles of Amazons は南米の風物を畫きたる小説的律語なり。ブラシル皇帝ドム・ペドロ親ら之を葡萄牙語に翻して常に愛誦せりとす。The Ship in the Desert は千八百五十二年彼父と共に陸路オレゴンに赴き始めて西方の荒野を横ぎりし時を咏じたるものにして下文中彼が獨特の詩風躍如たるを見る。

四十

A wild, wild land of mysteries,  
Of sea-salt lakes and dried up seas,  
And lonely wells and pools; a land  
That seems so like dead Palestine,  
Save that its wastes have no confine

Till pushed against the level skies.  
A land from out whose depths shall rise  
The new time prophets. Yea, the land  
From out whose awful depths shall come,  
A lowly man, with dusty feet,  
A man fresh from his Maker's hand,  
A singer singing oversweet,  
A charmer charming ever wise;  
And then all men shall not be dumb.  
Nay, not be dumb; for he shall say,  
"Take heed, for I prepare the way  
For weary feet." Lo, from this land,

五十

Of Jordan streams and dead sea sand,

The Christ shall come when next the race

Of man shall look upon His face.

彼又 Sappho and Phaon の篇に附記していはく吾がゆくすゑの詩人よ、才徳の人は官職名譽財寶を獲べし。而も才徳の人世に乏しからず。されど若し汝等詩歌の賚を獲むと欲せば、直に斷乎たる選擇を爲して、銳意一途を守らざるべからず。吾等は二人の君に仕ふること能はざるなり。マムモンMemmonの神を拜して詩人たりしもの古來一人もあるなし。身を奉ずるに質撲簡素を以てし、神を恐れ、心を畏み、信仰、希望、慈愛の三者を銘記すべしと。これ自由主義を基とせる北米詩人の告白にしてまた勸告なり。

### テニソンと羅甸文學

英國の詩人は、古來希羅古典の素養深く、引證類句を用ゐる事頗る多ければ、此文學を研究する者も亦精しく古文を學ぶ事必要なり。ピオウルPioulの昔は云はず、チオサアThosaaが伊太利亞文藝の助を假りて、古代文化を吸收せしより、沙翁彌兒敦の戯曲詩文降ては又近世の文辭に至る迄ホメロスHomer、エルギリウスErgilusの感化は歴々として徴す可し。

テニソンは十九世紀の大詩人なり。流麗雅醇なる聲調は甚く一代の人心を感化し、今代風騷の道に偉大なる影響を齎らし、事疑ふ可からず。吾邦の西文を解する者亦大に之を愛誦すれど只邦人の目して其傑作と稱する所、大概批判の正鵠を失ふを憾とす。畢竟するにこれ聲調を味ふ耳なく、古典感化の蹤を明ひる眼なきに座し、また、研鑽の法に

粗鹵なるが爲なり。

テニソンが希臘の文學中、特にホメエロスの作を愛せしは彼が秀拔の譯詩にても徴す可れども其詩才實はホメエロスの海潮音に非らずして、寧ろエルギリウスが山野の調なり。されば晩年マントアの騷人を頌して、羅甸文學の典雅を賞したるもの、景情優婉にして餘韻を失はず、吾が常に其傑作として愛誦措かざる所たり。然れども一きは精緻の評眼を以て其作品を窺ふに、共和政代の詩客、羅甸の大抒情詩人カトルルスの例も、また歴々として章句の間に隱見すべく、晩年にシルミオの潮を咏せしも偶然ならざるを知る。

Tenderest of Roman poets, nineteen hundred years ago,

Ave atque vale of the poet's hopeless woe.

舷歌いくばくもあらずして、古人を慕ふ風雅を湛ふ。

カトルルスの感化はテニソンが處女作期に於ても見る可し。Eleanoreの五章はサッポオの歌を模びたりといふカトルルスの戀歌に負ふもの少からず。Edwin Morris 中

Shall not Love to me

As in the Latin song I learnt at school,

Sneeze out a full God-bless-you right and left?

† Aene et Septimius 中

Hoc ut dixit, Amor, sinistra ut ante

Dextra sternit ad probationem

を言ふものならずや。又 In Memoriam: liv

I hear it now and o'er and o'er,

Eternal greetings to the dead;

And "Ave, Ave, Ave" said,  
"Adieu, adieu," Forevermore.

は悲愁極みなき萬古の絶調と古より持囃さるゝカトールルスの哀歌  
Atque in perpetuum, frater, ave atque vale

なり。其他 Pithonus の叙景に Attis の像を存し Boidicea は其調を Attis  
と同らし、殊に Hendeasyllabics はカトールルスの聲調に模びぬ。夕潮に明  
星の流るゝを見て人生の埠頭に法をときしこの人も亦レスビヤの雀  
を羨みし詩人の調に學びしか。古典の感化獨りスフィンバアン、モリス  
等に限らむや。精覈なるテニソン研究はエルギリウス、カトールルス、ル  
クレエテ、ウス等の考證を要す。

### 虞翁の著書

虞翁の生涯は夙に天下の識る所敢て多辭を要せず。高潔なる老政治  
家が遺骸は莊重なる典禮を以てエストミンスターに收められたれど、  
神學に詩文に盡瘁したる勞力の結果は、永く後代に傳らむ。選舉場裏  
の演説筆記其他純粹なる政治的著作を除くはか、彼が文學に關する作  
品は Studies on Homer and the Homeric Age. 1858; Ipece Homo. (Critique on Prof.  
Baeley's work) 1868; Juvenis Murdi 1869; Homeric Synchronism. 1876; Gleanings  
of Past Years (at intervals); Landmarks of Homeric Study. 1890; The Impregnable Rock  
of Holy Scripture. 1890-92; A Translation of Horace 1894; Butler's Works (edited)  
1896, Studies subsidiary to the Works of Butler 1896 なり。而して虞翁の處女  
論文「政教論」が麻克禮卿の批判にのぼりし事は、邦人の英語を解する者  
齋しく熟知する所ならむ。



## 佛蘭西の新劇

佛蘭西の詩人ロスタンが新作 *Rostrand*, *Cyrano de Bergerac* は、さきに巴里全  
都の好劇家を喜ばし、如く、今復英の劇界を聳動しつゝあるなり。此  
作家なほ春秋に富み、瀟洒秀麗の韻語劇詩の類を以て文壇の譽を求む  
ること數年なりしが、此新劇に於て佛蘭西特殊の精神を發揮し、久しく  
寫實派自然主義等に依て壓服せられたる卓犖の氣を文學に復活した  
り。シラノは十九世紀の上半に於ける實在の人物にして、奇行俠勇を  
以て名ありき。玲瓏にして温厚なること古の大人に耻ぢざれど、容姿  
ただ揚らずして、婦女の寵を受くること能はず、半生の奇俠、徒らに遊子  
の爲に資するあるのみ。彼しかも陰徳の報なきを憾みず、寛容の性を  
以て世上の風波を凌ぎ來りし經歷は此新劇が基をなせり。性格の描

寫、細緻なるは素より近世文學の大勢に従ひしなれど、此新劇に於ける  
臺詞の洒落豁達なる、又は豪壯の韻語を以て俠勇の心を行りたる如き  
近年まれに見る佳作にして、衰殘澆季の聲を耳にする今日に於て、夕紅  
の晴を約するに遇ひたる如き感あり。佛英の評家音を同して曰く、*デュマ*  
*ウマ*の衣鉢なほこゝに存せりと。吾等亦不朽の*デュマ*を追憶して彼  
が鼓吹のなほ混びざるを賀すると共に、邦人が佛文の根幹を尋ねずし  
て其末葉をのみ云々するに慨せざる可からず。

吾邦に於ける佛文の傳燈は、今日將に消滅の否運に近からむとす。法  
政の學に志す者たゞ僅に此語を修むるのみにして、餘の技藝學術は英  
獨二語の媒介を用ゐるを常とすれば、典雅にして臺閣の風ある此好文  
學は知己を世に失はむとするか。而して西歐他國の文學を味ふもの  
多くは*アラ*、*ドデ*等の英に翻したるを愛し、終に十七世紀大家の著を

味ふ域に進まず、ボシエエや、ラシイヌや、コルネイユや、將またパスカル  
の深奥を究めむとするもの無し。小説の書に於て *Manon Lescaut*, *Paul*  
*et Virginie* は古ければ云はざれど、せめてアレクサンドル、デュウマが大著  
を玩賞して、これに尊敬の意を表せざるは何故ぞ。文藝百年の計、もと  
より一時の好尚を以て定め難けれど、ロスタンの新劇一世の歓迎を受  
けしは、天津橋上に杜鵑をさく思わらずや。吾等はデュウマの不朽なる  
を信じ、此の如き想の健全なるを信じ、*Trois Mousquetaires* の如き稗史が滔  
々たる戀愛小説、悲惨小説の上にあるを信ず、アトス、ポルトス、アラミス、  
さてはダルタニエンの姿は忘れむとして終に滅すべからざる人物な  
り、若しロスタンにしてデュウマの衣鉢を傳へ今後の著作に於て今回の  
榮譽を虚くせざらむには、西歐の文壇に資する所少小ならざる可し。

(補遺) *ロスタン* が *Le Samaritain*, *Evangile en trois tableaux* 宗教劇は千八

百九十七年四月十四日聖水曜日之夜はじめてルネッサンス劇部  
の場に上ばりぬ。清妍の詞を以て敬虔の意を演べたる此新劇  
は界をシケムの郊外に設け想を基督教の真髓に置きたり。か  
のサマリヤの女として世に傳はれる信女を呼びて茲にフォオティ  
イヌといふ。

イエスはヤコブの泉に近く座してスカルの樹陰に休ひ給ふと  
き水瓶を携へたる女の歌ひつゝ來るを見る、其調は宛も古の雅  
歌のそれなり。聖典の絶唱を補綴してふるき錦繡に新たなる  
光彩を加へたる如き歌謡をぬきいでたるは序幕第五齣なり。

*Photine, descendant le sentier.*

*Atrapez ces renards qui ravagent nos vignes—*

*L'amour est bien fort sur les coqueurs!*

Donnez-moi du raisin à sucer, car je meurs

Le bien-aimé me fait des signes.....

Atrapez ces renards qui ravagent nos vignes!

A travers le treillage, hier, il me parla :

« Debout, ma mie, et viens, ma belle!

L'hiver a fui, la pluie est loin, les fleurs sont là :

C'est le temps de la ritournelle

On prétend que quelqu'un dans le pays déjà

Entendit une tourterelle ;

## 人生の批評

詩歌は人生の批評なりとマシウ、アアノルドが説破してより、藝術を論

ずる者、屢之を襲ひて品隋の標準とせり。然れども身自ら文藝の業に従ひ、丹青を黜し、形管を手にする者、終に永く此論定に服する能はざるが如く、燃犀の評眼ある學藝の研究者も、亦こゝに盲從するを肯せざるなり。奔放の情熱ありて、不羈卓犖の詩才を逞うする現代英詩壇の驍將ジョン・デヴィッドソンは、近頃問答の體を以て文藝其他の題目を論せるうち、此有名なる「人生の批評」といふに就て、自家の懷抱を公にせり。曰く批評とは何ぞ。判くなり、讚むるなり、赦すなり、罪するなり。これ眞に必要な術にして、而も感謝せらるゝ業ならず。藝術の道、しかく冷刻なるものならむや。詩文は世相の闡明にして、これが批判にあらず。これを沙翁に徴するに、Finonを畫くは、Hamletを寫すと同じく、之をイブセンに見むか、Brandの豪壯を述ぶるに用ゐたる詩才の、等しく惜げなく Peer Gynt の痴態を記するに注がれたり。人或はハアンスが「井リ

イの祈禱を以て一篇の諷刺といへど、吾は此詩人にさる方の偏頗なきを信ず。宗教こそ人生の批評といふべけれ、詩家は宣告せず、非難せず、燃犀の透察は何人をも何物をも卑まざるなりと。テ・フィッソンの抱負は、實によく、近世美術の傾向を示しぬ。彼にフリイト、ストリイトの詩ある亦宜なる哉。

## 歴史小説

歴史小説の衰凋は、歴史其物の研鑽日々に精緻なるに起因す。吾等は餘りに史眼を有す、餘りに史的発展の逕路を知れり。この醒覺せる民衆を誑きて、過去の時代を復活し、其空氣と色彩とを新にせむこと、新思潮の回瀾あるにあらずむば、到底望むべからざるなり。頃日英京の二劇堂、時を同うして、デュウマが「三人武士」の小説を戯曲化したるを演すと

いふにつけて、デュウマがスコットの後を享けて、かの浩瀚なる歴史小説を物したるを憶ふに、彼は近世の作家の如く、正確なる青史に據らず、源泉の古文書に徴せず、自ら地を踏みて、「ロウカル、カラア」の穿鑿に意を用ゐしにもあらず。例へばア・ベ、ゴオテ、エが「佛國歴史問答」の如きあはれる書に基きて、半生の大作が腹案を設けしなり。而も一氣呵成したる行文の明暢雄健なるは、彫鏤の辭章、稍もすれば、斧正の痕を残すが如き嫌あらず、實に彼が自ら誇て「La littérature facile」と稱し他の「La littérature en nuysuse」と區別せし、の當れるを思はしむ。辭章の幽婉にして多彩なる十九世紀作家中比倫なしといふ彼の「ゴオテ、エ」さへも、「Mademoiselle de Maupin」を著はすや、費す所僅かに五週、一日五千言を述べたり。さればあながちに現時の文壇を衰凋せりといふにはあられぬと、創作の情熱燃ゆるが如くなりし半世紀前と比して、秀れたる詩人騷客の數は更なり、

傑作の量に於て遜色なきにあらずや。今や轉移の機、其裡將來の英才は養はれ未發の思潮漸く熟せむとす。歴史小説の復興また今世紀に入りて望無しとせざるなり。吾等如今フロオベールが「サラムボオ」を繙くや、古の野史を善ふ如き情を以て之を迎へず、全く相違せる他の興味を覓めてなり。故に暫らくスコットを誦し、マンゾオニを讀み、痛心の現代より心神を放ちて、デュウマが残したる不朽の物語を樂まむかな。

〔補遺〕デュウマの稗史は積て數十種の多きに亘り其間優劣の差殆ど同日の論にあらざるものあり。今試に小説中に叙述せる時代に據て區劃し、かれが秀作を掲ぐ、

- (一) プロア王家時代—L'Horoscope ; Dame de Monsoreau ; Isabel de Baviere
- (二) アンリ三世時代—Deux Diane
- (三) リシエリウ、マザラン、路易十四世時代 Les Trois Mousquetaires ; Vingt

Ans Apres ; Le Vicomte de Bragelonne.

〔四〕革命時代—Memoires d'un Medicin ; Collier de la Reine.

〔五〕攝政時代—Fille du Régent ; Chevalier d'Harmental ; Olympe de Clèves.

其他 Monte-Cristo, Tulip Noire, Mes Memoires.

### 井リヤム、ブラック William Black

ステイザンソン、キップリングの盛名には及ばざれど、早くより英國小説壇の一方に霸たりし井リヤム、ブラックは、千八百九十八年十二月十日、ライトンの家に歿せり。彼は鬱勃たる詩才の横溢を以て文界に貢獻せし者にあらず、將亦人生の批判に因て、思想界を聳動せし者にもあらず、其小説を編むや、健全を旨とし、流暢を主とし、生命の疑問を解釋し、當時の病弊を指摘する用意更になきものから、暢達の筆路は却てホオル、

ケイン一派の文士を凌駕し、マリイ、コレリ等の俗臭なからむとす。

千八百四十一年十一月六日蘇格蘭グラスゴウに生れ、その小學に教を享けたる間、青湖蒼海のほとりに心を養ひて、後年の素地を成し、長じて暫く新聞事に従業せしが、後、倫敦に徙りて二十六歳の頃に、始めて小説を物しぬ。爾後滾々たる彼の文才は驚く可き多作を成したる外、詩人コウルドスミスW. Wordsworthの傳を叙したるもの彼が唯一の評論なり。ブラックの小説にして人口に膾炙するもの *A Daughter of Heth*; *The Strange Adventures of a Phaeton*; *A Princess of Thule*; *Shandon Bells* 等なり

### ジョージ・ウィンダム George Windham

英國現内閣に其の人ありと知られたるカアゲン氏が印度太守の榮職に轉じたるに因てジョージ・ウィンダム氏、後を襲きて外務次官に任せられ

たり。ウィンダムが瀟洒たる風采、下院第一人と呼ばれ、才幹、群を抜きて著るしきは、既に洽ぬく知られたる所なれど、その最も得意とするものは、蓋し文才なるべし。沙翁學者として評眼の銳利なるは「ソネット」の序論に於て見るべく、又ライツドル王朝の譯著を新梓して「ノオス譯アルウタアク」を註せし手腕に窺ふ可し。彼は英國政治史に於ける文學と政治との密接なる關係を顯せる一例にして、廟堂の折衝が、必ずしも精緻の學殖と背馳せざるを證して餘あるものなり。顧みて、没文野卑なる吾邦現時の政界を思へば、轉た厭惡の念を禁ずる能はず。

### キップリングの新著

キップリングが千八百九十八年の秋マクミラン社より *The Day's Work* と題して出版せる短篇集はよくこの天才の面影を窺ふべし。總て收む

るところ十二篇描寫の範圍頗る廣く、裡に現出したる題材中には、男子あり、女子あり、動物あり、又器械ありて、人をして應接に迫なからしむ。小説は固より人間の描寫を以て主とすべしと雖ども、人間以外に脱出して時に其限りなき想像力を動物界に試み、器械類に逞しくするも亦妙ならずとせず。唯た貧弱なる想像を有するもの、達し得ざるのみ。然るにキップリングは動物を主人公とするも、將た器械を主人公とするも均しく成効あるは、まことに非凡の天才なるを證明す。ことに器械を遇すること恰かも生物の如く、鋼鐵をして血あり肉あらしむる伎倆は眞に破天荒と稱すべく、古來氏を措きて一人も求むべからざるなり。但し讀者の側に於ても眞に之を味はむとせば、器械を器械として冷視する木強漢の能くするところにあらずして、偉大なる器械力を多少人化して驚歎し得る人に限るべきか。

談話する動物の物語は先きに「ファンケル、ブック」に巧を極めたれど今回も亦概して成効せるもの多し。又十二篇中三篇は氏が例の筆致を以て書きたる英人がたぎにして、その中 William the Conqueror は尤も傑作といふべく、途上餓にのぞめる小兒等を抱きあげて山羊の乳を飲せつゝ進むスコットのさまは尤も人の記憶を捉ふ。

(補遺)The Day's Work 中收むる所 The Bridge-Builders—A Walking Delegate

—The Ship that Found Himself—The Tomb of his Ancestors—The Devil and

the Deep Sea—William the Conqueror—007—The Maltese Cat—Bread

upon the Waters—An Error in the Fourth Dimension—My Sunday at Home

—The Brushwood Boy の十二篇中最初及び最後の篇最も心が心を得たり。

## 佛文近著

アナトル・フランスの玲瓏瀟洒なる筆致は、近歐の文壇に隠れなき所に  
して、微妙の諷刺また佛人の嗜好に適ふ。このごろ稿を屬したる一著  
未だ世に現はれねど、文辭脚色の美、これまでの著作に比して一層の進  
境ありと傳ふ、紫玉環 *L'Anneau d'Amethyste.* と題す。

ガストン・バリは碩儒なり。文獻學の泰斗にして、中世古文に精通し、  
ルウゼル數多の詩文、この人の爲に復活したり。今回少年の讀物とし  
て Didot が家の美しき印刷により *Aventures merveilleuses de Huon de Bordeaux*  
*et de la belle Esclanonde* を出しぬ。材はシノルマンニ傳説の一にしてオ  
ペロンの角聲、いつもながら瓊瑤の氣を傳へ、夢幻の仙寰に魂を飛ばし  
むる妙あり。ポルドオのユオン國を出て、難を冒し、絶代の麗姫を覓め

て、魔王を討ちたる瑰麗の奇談、茲にガストン・バリの典雅なる近文に譯  
されたるは、少年子弟の娛樂のみならず、中世文學研究の一慶事なりか  
し。

筆に清妍の氣あり、想は田園の趣味を傳へて、佛國農民の精神を穿てり  
といふルネ・バザン *René Bazin* は、*Terre qui Meurt* と題せる小説をものし  
ぬ。「兩世界評論」も亦これを載せたり。ビエル、ロティが「ラマンチ」このか  
た、かく清冽の思を讀者に興ふる作なかりきと評壇の品隘いと高く、或  
人は「サイラス、マアナア」「プティイト、フデット」と伍すべき書なりとさへ賞  
揚す。妖艶はあり、深刻はあり、奇聳はあり、獨り素香なつかしき清妍の  
文はめづらしきをバザンの作出で、茲に人意を強うす。

〔補遺〕バザンの事に就て *Donnie* が *Ecrivains d'Aujourd'hui* に述べたるは  
同情饒かなる評隘なり。



## 筆資萬貫

萬貫の筆資を捧げて、名家の稿を乞ふこと、近年めづらしからねども、昨年上梓の書中、最も多額の資を捧げられたるもの、却て軍人にあり。キップチナア卿、僞聖を蘇丹に破て還るや、五千鎊を捧げて、軍記の編纂を求めし書買あり。「多謝す、されど余は軍人に止まらむ」とは將軍の答なりき。米の提督デューキイ、亦非律賓戰記の寄稿を、一雜誌より乞はれぬ。謝金千鎊と號す。「萬謝、されど余は多忙なり」と提督は答へたり。米軍の勇士ホブソンは、荐りに「メリメック」沈没の記事を托されて、辭する能はざりき。乃ち「センチリイ」所載の文、原稿料千二百鎊と傳ふ。然れども彼は一萬鎊を捧げて、巡回講演を望みしものを否みぬ。因にいふ、センチリイの記事は、始め千鎊を捧げられたるなれど、ホブソンは委細を已が

辯護士に托したるに、因り終に千二百鎊を得るに至りし由、書買と筆資を論ずる既に甚だ快よき事ならず、ホブソンが狀師に托して利する所ありしは、面白きやうかたかな。

## キップリングの新作

米國漫遊の途に上れるキップリングは、頃日病を獲て諸人を憂悶せしめしが、既に漸く快愈に近づきしといふ、悦ぶべし。今この大詩人の令譽は、五洲隠れなく、殊に大英の殖民地はるかに響きわたれど、始は米國の人士唯彼を賞歎して、未だ好愛するに至らざりき。キップリングが米國を評せる文、さきに「タイムズ」の紙上に出で、又米人氣質を咏せるもの、「七海」の集中にもありて、ともに新大陸の血族を、極めて稱美せざりしが、近時米に遊で、米西戰後の經營を論せる率直勁健の一編は、いたく米人の

胸臆を打て、人望とみに増せりといふ。この詩 *White Man's Burden* と稱す。暗誦の後自ら真摯剛邁の精神を寓せる一家の詩風、次の一章にても窺ひ知られむ。

Take up the White Man's burden,

And rap his old reward——

The blame of those ye better

The hate of those ye guard——

The cry of hosts ye humour

(Ah slowly!) toward the light:——

“Why brought ye us from bondage,

Our loved Egyptian night?”

此詩始めて McClure 及び *Literature* の誌上に出で、英米の雑誌争て轉載し

ぬ。全章近くは *Japan Mail* にも現はれたり。

### アストンの日本文学史

かのエドマンド・ゴスが編纂長となりて文獻ある各邦の文文学史を出しし内ガアネット氏が伊太利亞文文学史の如きは、簡勁の長所を有すると共に、色彩豊にして含蓄ある筆路、讀者を倦ましめざる妙あり。わが此頃の讀物の中心ゆきしもの、一なりき。今亦アストン氏が吾邦の文藝を叙したるを手にす。未だ全卷を通讀せざれど、異邦の學者が筆になりしとれもへば、おもしろくも、まためでたしと覺ゆる節多し。宜なり。此日本學者が書紀の翻譯、語格の研鑽によりて、正當なる榮譽を西歐の學界に待たるも。本邦文學の時期を別つに甚しき誤謬なく、王朝の文學をいひて紫女が才筆に及べるあたりは特にアストン氏が得意とす

る所なるべし。只元祿の代を論じて未だ其精神に參せず、今日の吾等に言ふべからざる興味を有する徳川末期の文化を深く掬せざるを憾とす。然ども此處は現今吾邦の國文學者も何等の嗜好なく、零碎の研究だに乏しき時期なれば、外邦篤學の士に於てのみ之を攻むるは頗る酷なりといはざる可からざる也。西鶴が筆なりといふ懷硯卷の一、案内知つて昔の寢所を譯して、淡路島通ふ千鳥の鳴く聲に世の哀見る事ありといふ冒頭をも逸せず、鄙びたる男の仕業には神妙なる取置ぞかしの結尾をも洩らさで、清楚の英文原篇の奇警なる筆路を傳へたるは吾等が見て嬉しむれども、耻かしと顧みる所なるべし。この物語もとより船付の地にあり得べき筋にして英文を知るものは誰かテニソンが「イノック」の詩を思ひいでざらむ。われさきに此を桂冠詩宗の作と對比せむとする意ありき。今アストン氏がいみじき筆に移されて世に

傳はれるを喜ぶ。

明治文學に對する見地には喙を容るべきもの少からず。此點に關する氏が材料は教育に従事せる外人の評などより來りしふし多きが如し。「多情多恨」を以て尾崎氏が才思を察し、幸田氏をいひて「五重塔」「笹舟」等を數へざるは所謂見當違の誹を免れず。もとより「たけくらべ」の如き秀什は景情ふたつながら外人の味ひらべき最後のものなるべければ、樋口氏の名見ゆるも、無理ならぬ事なれど、此章にはあらぬ人の價値より多く見たてられたるあり。

此書の細評は後日の精讀を待ちてすべけれど、外邦の文士によりて此の如き牀裁備りたる文學史の公にせらるゝを見ては、今更ながら國文學者の無氣力なるを歎かずむばあらざるなり。知ていはざるはよし、知らずして著さいるは名譽あらず。かのサア、アアネスト、サトウ、チム

ハレン、アストンの亞細亞協會報告を抽讀して文法の末技を事とし國民文學の大成に寸毫の貢獻なき人々此書に接して何の感ありや。

### 文字のしるべ

アストン氏の日本文學史が泰西の文壇より遙かに絶東の文獻を論じて邦人の驚歎を博せし如く、チェムバレン氏の近業、文字のしるべは等しく我が國語學界に著るしき印象を興ふるものなる可し。大版四百八十頁餘の美麗なる書にして、全篇を十三節に別ち、添ふるに漢字索引を以てす。第一に緒論あり、第二に文章語の特點を説き、第三に平假名練習、第四に普通使用の漢字四百を教へ、練習を加ふ、第五に漢字の構造を説き、第六には大岡政談、指手錠の全文を掲げて練習に供す。第七には假名に就て述ぶる所あり、第八固有名詞の條には地名人名の難き易き

を列舉し、第九に新聞切抜、廣告等を蒐み、第十には近文數種、今の文壇に名ある人々の作を擧げたり。其他第十一のくさく、第十二の尺牘文、有益とは愚なり、好學の傾ある一般讀者にも興味饒なる近來の大著述なり。緒論は、特に氏が獨特の文脈を以て、奇氣人に迫る鋭筆、心あるもの、認むる所なる可く、羅馬字の失敗を論じて、不言、不語のうち、新國字論者の大言壯語を抑へたる所、快心の文字なり。將來の國語は、必ず假名にて或は羅馬字にて綴らる可し、否綴られざる可からずと揚言する内外の士を駁して曰く、噫、諸君は自ら惑ふ者なり、或は他に惑はされたるなり。假名にては不足なり、假名のみにては、國語を成さざるなり。唯僅に極めて少部分をなすのみ。諸般の著作、新聞、公文書のみならず、私人の受取證、計算書、ピラ、廣告、書簡、コック、ボオイ輩の私書に至る迄、日本人民の生活事業に關する萬般の書類は、皆漢字を基とするに非らず

や。又曰くアングロサクソンは其學に於ても實行的ならざる可からず。難事眼前に在り、勇を鼓して正視し、勤て已まずむば、真正の智識は其掌中に歸せむかなど。吾は深く泰西の文物に情を寄せて、南歐の暮雲に思を馳せ、西海白聖島裏の青野をも夢むる者なれど、又同時は吾邦古來の文化を尙び國俗習慣好尚の上に抜く可からざる執着を有す。西歐の文化をも味はず、祖國の人文にも浴せざる徒が、近時荐りに説をなして、日本人民の好尚を劣下せしむるに平なる能はざるなり。事は單に語學の一問題なれど、着實にして含蓄ある議論を、却て異邦の學者より聞かむとはそもく悲喜いづれぞや。

近文數篇の節味ふ可し。首に朝報社募集の座右銘あり。續て法學博士田口卯吉氏が「日本人種論」の一節を掲げ、其他幸田露伴氏が「夢日記」粘川氏が「瀛車中の當世紳士」櫻庭篁村氏が「房州一見の記」福澤諭吉氏が「福

翁百話中の「謝恩の一念發起すべきや否や」加藤文學博士が「貧賤百話」中の「漢學者」最後に「時事新報社説の「排外思想の系統」を擧げたり。各附するに難句の解義を以てしたれど、特に福澤氏と加藤博士との文には簡單なる評論を挿みて、兩者の共に唯物主義なるを説けり。福澤氏を評して曰く此人の思想は淺薄にして主義は粗大なる唯物論也。加ふるに功利主義の倫理と愛嬌ある樂天主義とを以てす、福翁百話之を證して明なり。されど現今教育ある日本人の大多數が、皆これと主義を同うするは、頗る注目すべき事ならずや。思想界の領袖にして既に斯の如し、此教が社會の下層に浸染して、古來漢學思想の僅小なる殘余を掃蕩したる時、未流輩の行爲は、果して如何になりゆくらむ。現代を稱して明治と號す、其裡の光明にして、既にかくも暗黒ならば所謂暗黒のはこそ推し量らるれど。加藤博士を評して曰く、この人學殖あるかも

しるき紳士なれども、所説は甚しく道德破壊の傾向を有す。所謂心までの唯物論にして、而も日本人流に、極淡泊に臆面なく述べたる唯物論なりと。チムバレン氏が *Things Japanese* などに露せる論鋒龍鱗の如く瞥見せらる。吾平生誦讀する所多く古人の書にして近文を手にする事少なり。故にチムバレン氏が品隲の是非を判するに苦む。謂々たる其道の論者今の世に少なからねば別に説ある可し。

要するに本書は漢字を習得せむとする外人に對して、極めて便利なる手引なるのみならず、國語教育に意ある人にとりても少なからず、裨益する所あらむ。漢字使用の範圍を知らむと欲して市内有數の印刷工場に問合せ、之を基として全篇の構成を計れりなど、單純にして而も人の爲さざる點に注意したるものなり。之を滔々たる新國字論者に比して何等の差違ぞ。氏が學識は夙に世の認むる所なれど、此書を繕く

に及で、益々氏に一種の頓才あるに服せずむばあらず。謂ふに本書の如きは決して獨逸學者などの手には出來うべからざるものならむ。文牀時に奇聲にして警句あり、一道の霸氣人に迫る所あるは、氏が幼年に享けたる佛蘭西教育の感化にあらざるか。

西人の學に成功するは、一には普通智識を具ふるが故なり。評眼の犀利なるも亦茲に在り。かの詩文の趣味なくして文學の史を説き、俗語の微韻を捉へずして標準語を論ずる如きは、到底眞摯の智識を得る能はざるならむ。心ある學者の著には、たもはぬ興味わきいで、楚々人を動かす所あり。例へば近時アストン氏の文學史に徳川時代小説家を評し去るくだり、*Non rationiam di lo* (彼等いふに足らず)の句あり。されどこの文の妙を解するひと幾人ぞ。

## 畫家バアン、ジ・ウ・ズ Sir Edward Burne-Jones;

英國現代の畫家にして世界的令譽あるものはサア、エドワード、バアン、ジ・ウ・ズなり。而して我等は彼をアレラファエライト結社の一員として、ロセッテイ、スピンハアン等の親友として、英國近代の一思潮を代表せる者として、記憶するなるに、シリヤム、モリスが土未だ乾かず、復バアン、ジ・ウ・ズの訃に接して哀悼の意殊に切なり。千八百九十八年六月十七日、クリステイナ、ロセッテイ紀念の畫を其幽麗なる丹青の絶筆として逝きぬ。

彼が故里はバアミンガムなり。其父をリチャード、ジ・ウ・ズといふ。幼年より美術の傾向を有し、丹青の業に身を委ねむとせしは、父の業とせし所、彫塑工藝の術に亘りしが故なる可けれど、彼が祖先よりの遺傳に

は、業に既に、幽婉熱烈の審美感を含みたるが爲なり。彼はケルト民族の血を享けて、近世の美術に一大動機を興ふべき素性を具へたり。千八百三十二年八月二十八日に生れ、同じく五十二年、教職を望みてオックスフォード大學に上り、茲に始めてシリヤム、モリスと刎頸の交を結びぬ。大學に於て修むし古典の達觀、近世文藝の翫賞は世を終ふる迄、彼が經歷に感化を興へしと雖も、半生を訓誥の學に費して、現代の文藝に接觸せざる枯學の徒にわらず、教職に身を委して、繙徒の間に交はるが如き、固より其志ならざるを、時なるかなダンテ、ゲブリエル、ロセッテイ等が唱道せしラファエル以前の後素を重じて近世文化の暗潮を顯はむとする畫派は、終に此秀才を驅つて美術の界に投じたり。其後ロセッテイと相見るに至り、終に意を決して、五十六年の春大學を去りぬ。爾後精勵、丹青の技巧を修養し、屢に描かむと欲して描く能はざりし多年の思想を

發揮せり。幼年より師に就て後素の業を修めしにあらねば晩學の歎無きにしもあらざりしが、數年の勤業は、終に此大阻礙に克つを得たり。彼が丹青秀什の題目を掲げむも煩はしけれど唯一言すべきは技巧のみ尙びて、色彩陰影の配合、又空氣調子等の細技に重きを措く今日の西歐畫風と異り、彼が詩的題材を驅使して、宜く其精神を捉へ、幽麗微妙の一畫風を掬めたることなり。吾等はもとより繪畫の獨立を認む。即ち繪畫は無聲の詩なりといふ單純幼稚の意見を抱く者に非らず。されば色彩を塗抹して之を畫なりと稱する極端の近世說に抗すると同時に拙劣の技巧を蓋ふに詩的題材を以てし觀者の記憶想像を動かす詩文の力を假りて、辛らく凡俗の喝采を博せむとする陋手段を卑しむ。然るにバアン、ショウンズの畫は、題材既に詩歌の妙趣を具ふると共に、技巧亦一世を抜き一筆苟くもせず、丹青の助に因らずむば決して

傳へ得ざる逸興津々たり。嘗て客に語て曰く余か筆を下して布に向ふや、精微を望みて、勞苦を吝まず。若し後世吾が繪畫の零片のみ存在すと雖も、これに據て吾が手腕を批判するを得しめむと欲すと。藝術的良心あるに非らずむば何ぞ此言あらむ、此行かわらむ。

彼はケルト民族の傳説に源を發したるアルトル物語に多く題材を探れり。これ昔モンマスがシニフレイの傳へマロリの述べ近代またテニソンの歌ひしもの、而もバアン、ショウンズを鼓吹して其大作あらしめしものはプレラファエライト結社の思想なり。さればその描けるトリストラムは、テニソンが「アイデルズ」中のそれに非ずしてスフィンバアンが歌ひしそれなり。ロセッテの感化亦畫家に著るしく、彼が韻語に述べたるもの、こゝに丹青を假りて描かれ、對照類似の妙いふ可からず。古詩「バラッド」の姿も其畫風に依れりといふ。彼また宗教の材を好みベッ



レヘムの星といふ大作あり。又永貞童女の生活を畫きたるあり。共に近英繪畫の傑作たり。

アレラフアエライト結社の詩人畫家先年ロセッティ逝きてより之をモリスに失ひ今またバアン、ジョウンズに虧く。殘るころアルシアノン、スギンバアンあるのみ。英文學ありてより聲調の卓絶微妙なるに於て比類なしといふ大詩人健在なれや。

### 文藝瑣話

北米の文豪マアクトエインは老來益々獨得の機智を恣にし、先年漫遊の後、名聲頤に加りぬ。今米國の文士にして、全世界に讀者を有するもの、蓋し彼を隨一とす可し。近き頃英國文士俱樂部の饗宴に招がれ懇るなる祝杯答辭として、おも白き口演を爲したり。曰く余はひとに自

作を褒めらるゝ時、敢て鼻じろむことなし。否却て之を喜ぶ。曩にキップリングが紐育克の客舎に病むや、英米の親交益々厚きを加へぬ。余こゝに一好諧謔を設けむとして、苦吟旬日、一句を得たり。會衆願くは、寛假の意を以て之を聽き給ふのみならず、進で喝采の榮を吝む勿れ。

曰く英米既にキップリング(牛革)に於て締結されたる以上はトエイン(二分)に離隔せらるゝ勿れ。呵々。(Since England and America have been joined together in Kipling, my they not be severed in Twain)

マアクトエインは、今蘇格蘭の青山白水に遊びて、祖先の國に詩腸を養ひつゝあり。一通信員にフランツ、ヨオゼフ皇帝の物語を爲し、といふ。維也納の都に謁を給ひし時、十八語ばかりの口上を整へて參内せしに、皇帝は直に懇篤なる御辭にて親しく物語せさせ給ひければ、先の用意は全く忘れ果て、終に今日まで思ひ出す能はずと。彼今二種の

作に着手せり。一は同時代の人物評にして百年の後ならずば出版せらる可きにあらず。他は即ち基督傳なり。滑稽の大家に此作ある、少しく奇妙なれど、實はむかしよりの志望なりといふ。  
 盛名キップリングの如きは、近世實に罕に見る所なり。作品第一版の需  
 要は、益々多きを加へ市價愈々高まり來りぬ。次に擧ぐる著書第一版  
 の價格に徴して流行の一斑を窺ふ可し。

“School Boy Lyrics” .....£120  
 “Echoes” .....”33  
 “The Quartette” .....”14  
 “Departmental Ditties” .....”21  
 “Plain Tales from the Hills” .....”8  
 “City of Dreadful Night” .....”6

“The Light that Failed” .....”10  
 “Life’s Handicap” .....”10  
 “Letters of Marque” .....”7  
 “Barrack Room Ballads” .....”1  
 “Soldiers Three” .....”21  
 “Story of the Gadshys” .....”5  
 “In Black and White” .....”3  
 “Under the Deodars” .....”3  
 “Phantom Rickshaw” .....”3  
 “Wee Willie Winkle” .....”4  
 “Naulahka” .....”10  
 “Many Inventions” .....”1

"The Jungle Book" ..... "1  
 "The Second Jungle Book" ..... "1  
 "Seven Seas" ..... "10

獨逸の學風に心酔せる若き大學の人が、諸書より亂抽せる雜駁の寫し物をのみ「エッセイ」と心得る世にモンテイニ、ペイコンの名を云はむも嗚呼なれど瀛西にも真正のエッセイスト少きは歎ず可きなり。ひとりかのドブソンは攻々として精練の文を草し、今度 A Paladin of Philanthropy (Chato and Windes) を著しぬ。例の十八世紀人文の描寫にして、當年の好尚、風俗紙上に躍如たり。學殖、行文ともに絶群、たのもしきはかゝる文人を有する騷壇なり。

Tom Brown's School Days の著者トマス、ヒウス、が等身の塑像は、今回ラグビー校内の勝區に建らる可し。

ロマン Polin がバルザックの塑像は先年佛蘭西藝苑の爭議となりて、褒貶の噂囂々たりしが、これを囑せし佛蘭西文士協會は新に「フルキイル氏」に托して大小説家の像を彫ましめぬ。千八百九十九年五月バルザック百年祭には間に合ふ可しといひしが其後如何なりしや。サラ、ベルナル Barth Bernhardt の伎藝神に入れるは衆目の既に久しく認めし所、今や世界の大名優なり。秀容いまに衰へず、妙伎年を歴て益益進みぬ。さきごろ政府より Théâtre de Nation 座を十二年の契約にて借入れ、汎く一般公衆に梨園の妙を傳へむとす。場代の廉なるを以て也。

ルイ、エルノオルは佛蘭西の作者なり。千七百九十二年イシニイに生る、今や百七歳の高齢に達し著作の小説また其齡と等からむとす。  
 James Matthew Barrie (一八六〇生) Sentimental Tommy は「デモソエ」の Trilby

に續きて、英來の讀書界を風靡せし著なり。結篇は「トムミイ後日譚」として千九百年の春、スクリブナア誌上に現はる可し。題して「The Celebrated Tommy」とす。

シェリーの詩いま伊太利亞にもてはやさるゝ由。奇しい哉、かの縹緲たる氣韻、かの清楚なる格調にして、絢爛これ尙ぶ南歐の騷客に喜ばれむとは。バイロンの流行今やこの國にて少しく衰へぬ。

セインツベリーの説なりとして傳ふ。曰く盛名を爲し大業を殘さむとする人は、よろしく世紀の終より甚だ遠からず、世紀の始より亦甚だ隔たざる時に生れざる可からず。サア、ラルタア、スコットの成功も實に其好期に中れるを以て也。彼千七百七十一年を以て生れぬと。吾も亦久しく此説を持す。閑人試に多數の俊秀に就て閱せよ。また思ふ、獨逸近代の碩儒詩人樂家の輩は多くの<sup>名</sup>を以て其名を初む

27. Schopenhauer, Schelling, Schlegel, Schlegel, Schlegel を始とし Schubert 然り Schumann もまた然らずや。此頃また思ふ、帝國主義を唱ふる者は多く姓名に金屬的音響を含めるハ音を有すと。詩人 Kipling, Lord Kitchener of Khartoum 北米合衆國大統領 Mr. Kinley 印度大守 Curzon. 等皆然り。ラスキン著書六十四種、これより年々二萬弗の收入あり、スフィンバアンは近業極めて稀に、時々舊作の改竄を爲すのみなるも、詩に依て年々五千弗を收む。

ホオル、ケインの近業、The Drunkard は小説として未曾有の高價なる原稿料を得可しといふ。先年かれが The Christian の英米二國に於ける著作權は五萬弗を利し得たり。千八百九十八年英國に於ける新刊六千八種にして之を前年に比して、二百三十六を減す。而して小説類少年書類に於て此減少を見しなり。

波蘭士の作家シエンキエヰチ *Henrik Sienkiewicz* の *Quo Vadis* は、始めて佛譯を見し時、精緻なる筆の蹤に感せしが、英譯となりて英米に行はるゝや、トリルピイ又、センチメンタル、トムミイ以後の流行となりぬ。羅馬城外、磔確たる沙丘の星月夜に、使徒彼得が基督受難の當時を追憶して、熱烈の信仰を衆徒に諭すあたり、全篇の白眉なり。皇帝ネロ文士ペトロニウスの性格等おもしろく寫さる、再讀の價值ある作ならむ。アウグスト、ストリンドベルグ *August Strindberg* は瑞典の作家にして、名聲漸く佛蘭西の騷壇を動し、*Axel Bary Inferno* の二篇今大陸に喧傳せらる。この人數學に精しくまた化學に通ず。中世僧門の心を以て、一齊の女人を憎み、惡魔權化を以て之を準ず、著書厭世の氣を以て充滿し、又舊教の傾向を含めりといふ。未だ讀まず。トルストイ伯の近業を、復活といふ。露國の一新紙に附録として現は

れ、又殆ど同時に米國の書肆にて英譯を出す可し。悲愁の景を寫すこと、まことしやかなるも、理りや、書中の一人物親しく伯に語りし所より、此書は成りぬといふ。莫斯科のバステルナク博士其挿畫を委託せられたり。

園囿をかまへし王者の奢は、愛禽に性を娛ましむる文士のすさびなり。近者好奇の士、佛蘭西近世文人の性行を驗みして、ねもしろき結果を得たり。湖畔落日の清愁をゑがきて、近世抒情詩の先驅たりしラマルテ、イヌは居常犬を愛して護衛親友の信を措きたり。ルナンの籠は、ひとへに其白猫に集り、*シャルツ* はひとり小禽をめでしどか。老デウマの愛は、博く禽獸に及びて、就中良犬に心を傾けぬ。ロテイが猫を愛するは、汎く人の知る所、雜著數篇の裡諸處に散見す。少デウマ犬を憎みて猫に偏せり、*ミシユレエ* が白猫は、嚴冬主人の頸に踞して、之を温め霜雪

の日外行の時は、衣中に潜みて、此靈活なる史家の手を寒からざらしめ  
きと傳ふ。英國の文士概ね犬を愛す、ひとり詩家スピンバアンが猫を  
寵するは著るしき異例なりかし。

土耳其の文壇は、これまで佛蘭西の稗史を愛してデヌウマ、シウ、エウゴオ  
等の翻譯少なからざりしも、未だ獨逸文學の精粹を迎ふる風なかりき。  
剛勇の稱、西歐諸邦の侮を防くこの國の軍隊は、將軍モルトケが遺策な  
らずや、赤帽の國何ぞ獨逸の藝文を等閑にすべきと慷慨したればにや、  
先頃好事の一土耳其文士、筆を驅てシルレルが「テル」を翻譯したるに警官  
忽ち其家に臨みて、刊本を沒收し、彼が軍職を罷て、直に國外に追放した  
り。この薄倖なる文士は瑞西山中に遊で湖上に居をトせりと稱す。  
亞米利加の一文人今遊で倫敦に在り。飛電一日故國の新紙より來て  
曰く直ちに鬼島に赴てドレエフヌを救ひ、共に携て亞米利加に歸れ。

賞金千磅事成らば三千磅なるべし。費金五千磅と。彼諾せざりき。  
博士マレエ氏が監督の下に、莫大の勞力勤勉を以て、着々歩を進めつゝ、  
ある空前の大著「新撰英辭書」は既にHODの條までを上梓せり。HYの  
部は久しく所在明ならざりしが、近頃恢復せられたり。又PA、PE部の  
原稿を紛失して既に十二年の今日、某家の厩に於て甚しく毀損された  
る斷章を發見したり。又曰く字典編纂の困難はHの部を以て最も甚  
しとす。

鋭犀の着眼奇警皮肉の筆を以て佛文壇に名高き閨秀シップは「ムシウ、ド、  
フォルイユ」といふ近業に當るべからざる諷刺を恣にす。小品短篇、喜劇  
對話其得意とする所、曩にトラリウ氏より誹譏の訴を受けて五千法の  
罰金に處せられたるも、政界の腐敗を罵りたる結果なり。

兩世界評論の典雅には及ばざれども、奇聳の霸氣ありて歐洲文壇の重

をなせる、ヌウエル、ルネウの近刊には少トルストイの新著あり。題して「シオパンの序樂」といふ。詩材を音樂に假りて、戀愛説の主眼を説けるものにして、父が「クロイツェル、ソナタ」と形を同うし、論を異にせり。倫理觀の著るしきは老伯が筆の趣を傳へたれど、彼の夢みたる峻嚴の理想説を採らず、かれが否みしといふ婚配の神聖を斥けず、人は一夫一婦の肉靈兩つながらの近接に依て、純なる戀愛を成し得べしと説きぬ。吾は世人が「クロイツェル、ソナタ」の眞意を誤解せることを信ずるものから少トルストイの穩健なる書の世に悦ばれむを疑はず。

キップリングが盛名は殆ど其頂點に達せり。彼が造詣する所、今日に於て未だ斷定すべきにあらず、天才の泉なほ涸れざるが如き觀あれど、暫くにして、一旦令聲の衰ふる事あらむも圖られざるなり。彼が新著の短篇小説に關して、既に文壇の偶語無きにあらず、或は荐りに蒸氣、汽罐

を詩材にするを非議し、或は熱烈なる當年の感情を乗て、冷刻の域に没したるを喋々するあり。然れども、誰ありて未だ鼎の輕重を問ふほどの抗駁を敢てせる無し。時宛も列強瞰視の際に會し、猛獅の威風は白砂飛ぶオムドルマンの原より、漸く長城の南を壓せむとする候なればにや、雄大なる韻語、簡勁の散文、共に國民の意氣を表彰するに足り、曩に軍艦に遊で、海軍の饗宴に臨みし時、滿艦悉くキップリングに謳歌して熱意を示したりといふ。近業中、熊狩を歌ひしものあり。牙を鳴らし、爪を鋭くする時は、未だ懼るゝに足らず、頭を俯し、掌を平にし、溫柔を裝ふ際は、正にこれ戒心の秋なりと。吾人は萬國平和會議の問題に關して、稍々此大詩人と見を異にすれど、何れにもあれ、今日は世界史上最も興味ありて且つ危機多き時代なるを示すに餘りあらずや。

宗教の研究は年を追て精緻となり、其起源發達に關して聰明なる説を

耳にするもの多し。我國にも亦近時宗教哲學を説き、宗教歴史を究むる者増加し來れるは、喜ぶ可き現象にして、之を愚民の迷信とし、爲政の方便と蔑視せる昔日に比して長足の進歩なり。然れども吾等の信する所によれば宗教の尊重すべく、宗教學の興味多きを信する者は、大學に於ける聰明なる二三の文藝學者と世に隠れたる敬虔の信徒とあるのみ、滔々たる流俗の終に此眞趣を認めずして已まむとするは口惜しき限りといふ可し。又謂ふ、近時獨逸の學風盛にして其弊や抽象に陥り、枯學に流れ、例へば宗教の研究に於てもマックス、ミラー一流の言語學派、日光神話派に盲從して、人類學派の正確なる反證と説明とを等閑視する弊風ある如し。斯道の學者は其英語なるにも拘らずアンドルウ、ラングの明快犀利の作を繕き給はむこそ望ましけれ。ラングが近業 *The Making of Religion* は近來の名著なり。

## 英國小説史

エイル大學シェッファイルド物理學校英文學教授キルバア、クロスは、昨秋「英國小説の發達」マクミラン社を著せり。序論を合せて、全篇九章、三百頁別に傑著廿五種の表及び參考書を加ふ。著者自らの云ふ如く、從來英國小説の研究に就て、學者の引據するものはダンロップの「小説史」一八八八改版を尤とし、其他史傳には「英國人名辭書」一八八五—九九九を、中世文學との關係に就いては「エオトホウアの英國詩歌史第一卷」一八九五を、また「フレン」の十七世紀以前小説史「ラルター、ロオリイ教授の英國小説」を参照せしが、今此新著を以て更に有益の冊子を加へたる如し。著者は序論に於て、物語と小説との區別を略説し、第一章に入りて「アアサ」物語の昔より「リチャードソン」の小説に至る變遷を叙べたり。先づ中



世紀の物語より始め、西班牙の感化、又少し後れて處女王朝に於ける伊太利亞の影響を論じ、史的比喩の流行、佛蘭西の餘風、王政復古期の當時より、物語のやうく衰頹して、デファウの寫實に及びたるを詳説せり。第二章に進ては、十八世紀の大名即ちリチャードソン、フィイルディング、モレット、スタアンの評騭を專とし、ジャンソン、ゴウルドスミスの作品にも論及す。更に第三章は十八世紀過渡時代の文運を解説して、勸善懲惡より現代風俗の寫實に傾かむとする一思潮と、又一方には怪奇の夢幻談、又は莊麗の歴史小説を歓迎せむとする他の一傾向とを説き、シェイン、オオステンに章を結びて、第四章に入り、終に十九世紀の小説を論ず。ヲルタア、スコットの歴史小説、及び其傳統又戦争小説、大洋深森の小説、夢幻談の復興等に筆を起し、第五章を重にディッケンズの著作に捧げ、寫實的傾向の優勢を叙し、第六章サッカレーの品評に至て其勝利を説けり。リ

トン、ドロロップ、ブロンテの月旦を以て之に添ふ。第七章はガスケルの社會小説に起り、ジョオシ、エリオット近くはメレディスの心理小説を論じて頗る詳しく、第八章現代小説に論を結へり。ヘンリー、シェイムズを小説に於ける印象派とし、ワアド夫人、トマス、ハアデイを哲學的寫實派とし、ステイヴンソンに物語の復活を見、キップリングを以て寫實的印象主義に従ひ、恐れなく近代文明の詩趣を歌はむとする者なりと斷せり。全篇議論穩健にして事實の誤謬無く、英國小説研究者に對て最良の手引也。今著者が英國小説發達の順序を代表する傑作として、擧げたる廿五種の書名を左に掲ぐ。

1. Morte D'Arthur, by Sir Thos. Malory.
2. Rosalind, by Thos. Lodge.
3. Pilgrim's Progress by John Bunyan.
4. Robinson Crusoe, by Daniel Defoe.
5. Roderick Random, by Tobias Smollet.
6. Clarissa Harlowe, by Samuel Richardson.
7. Tom Jones,

by Henry Fielding. 8. Tristram Shandy, by Laurence Sterne. 9. The Vicar of Wakefield by Oliver Goldsmith. 10. Castle Rackrent, by Maria Edgeworth. 11. Pride and Prejudice, by Jane Austen. 12. Waverley, by Sir Walter Scott. 13. Kenilworth, by Sir Walter Scott. 14. The Pathfinder, by J. F. Cooper. 15. The Scarlet Letter, by N. Hawthorne. 16. Pelham, by Bulwer-Lytton. 17. David Copperfield, by Charles Dickens. 18. Vanity Fair, by W. M. Thackeray. 19. Barchester Towers, by Anthony Trollope. 20. Jane Eyre, by Charlotte Brontë. 21. Adam Bede, by George Eliot. 22. The Ordoul of Richard Feverel, by Geo. Meredith. 23. The Return of the Native, by Thos. Hardy. 24. Treasure Island, by R. L. Stevenson. 25. The Brushwood Boy, by Rudyard Kipling.

## 大英人名辭書

マレエの「新撰英辭書」と相對峙して、近年の大著述と激賞せらるゝ「大英人名辭書」(The Dictionary of National Biography)はシドニー・ライ氏等が編纂の勞に由て、着々歩を進め、終に千九百年六月を以て完成せり。此類の書もとより射利の業に非らず、學殖と熱心に添ふるに、公共の精神を以てしたるもの、出版者ジョオジ・スミス氏の言に據れば、十五萬磅の費額を要せしといひ發賣の結果この半額を償ひ得ば満足すべしと稱す。過日該辭書完成の祝宴には倫敦市長を首とし幾多の學者臨場して、モオレイ氏の演説あり。「羅馬衰亡史」の著者が幾年の勞終りて月明の半夜「アカシヤ」樹陰を逍遙せし感情より説き起し、品格ある機智諧謔を恣にして、會衆の喝采を博したりといふ。今スミス氏が統計に従て此辭書所載の人物を世紀に分て數ふれば次の結果あり。

六世紀	八一
七世紀	一三四
八世紀	九六
九世紀	五七
十世紀	七六
十一世紀	一八六
十二世紀	三七七
十三世紀	五一五
十四世紀	六七八
十五世紀	六五九
十六世紀	二一三八
十七世紀	五六七四

十八世紀	五七八九
十九世紀	一二六〇八
合計	二九六〇八

傳紀の最多數はBの部にしてC S H M P W G等之に次ぐ。即ち

Bの部	三〇七八
Cの部	二五四二
Sの部	二四二〇
Hの部	二四二〇
Mの部	二三一〇
Pの部	一八〇七
Wの部	一七九七
Gの部	一四九〇

而してZ部は僅に廿一項に過ぎず、Gの部は卅一項Uの部は七十五項にしてXの部には傳ふ可き者皆無なり。

此大英人名數書は數年前より定時次を逐て上梓したれば、吾もすでにSの部迄を時々参考閱讀せしが就中シドニイ、リイ氏が沙翁傳、四十九頁の詳説は、われも、人も、篇中の白眉とする所、大詩聖の傳紀に關する數百年の疑團始めて之に闡明せられたるもの多し。其他の詳傳にして精覈犀利の譽あるは、フアス氏のクロムエル傳、ステイヴン氏のハアク傳、スヰフト傳にして、なほフランシス、ベイコン、エリサベス女王、サア、ロバート、ラルポウル、サア、ラルタア、スコット、エドワアド一世、同三世、チャアルズ二世、スタアン、ニウトン、バイロン、キックリフ等の傳、亦賞賛せらる。ロイド中佐がエリントン卿傳、三十四頁も考證の精確を以て著はるといふ。英國史を學ぶもの自今此辭書に據らざるべからず。

### 近著數篇

曩にラスキンの逝くや、評壇の眼は、退いて久しき此老大家に注ぎぬ。生前には彼が著書、頗る高價なるにも拘らず、數萬部の發賣を見、僞版の普及枚擧するに堪へず、英米兩國何れの地方にも讀誦せられたり。ラスキン學會は倫敦マンチェスタア、グラスゴウ、リバアプウルに創立せられ、其研究を録すに、専門の雜誌を發刊し、其文學を擴むるにラスキン館を備ふ。この人の令名は單に文辭の巧妙を以てのみ、説明せらるべきに非らず、假令彼の社會改善策にして、夢想の弊を有する如き觀あるも、其主張にして現代組織の弱處に觸るゝと無くむば、かゝる多數の讀者を有する能はざらむ。佛蘭西の評家ロベール、ドゥラシユセラヌ Robert de la Guzeranne ラスキンが美の宗教を説きて頗る詳なり。 Ruskin et la religion

le la Beauté (Hachette) といふ。俗を異にする佛人の評鷹なれば、感情を挿まらずして公平の見なり。ラスキン文學の良参照たるを失はず。古代史の最も完きはマスペロの著なり。彼は佛蘭西に於てシム・ポリヨン、マリエット等の衣鉢を傳へ、現代全歐の埃及學者中第一位を占むる而已にわらず、過去の叙述に一步を進めて、全滅の時代を復活する史筆あり。尋常の史家には只影大にして内容うつろなる古史中の姓名も、彼が史眼に映すれば、執着深く情熱温なる君王美姫の姿を現す。而も此復活には確たる史的憑據ありて、架空の想像を逞うせるに非らざるなり。「東邦古代人民史」既に一卷に、始原、埃及、カルデヤを叙し二卷に諸邦の混乱を説き、近刊三卷に於てアッシュリヤ、メドペルシャの諸帝國に論じ及ぼせり。

ハシエット社近日上梓の美術書類中、ゲインズバロ、ルウベンス、ラファエル

ロの三大畫家に關するもの各一卷あり。英の名家を論ずる卷はサア、ラルタア、アアムストロングの編纂にして、挿畫美を極め、かのシッドンス夫人ロビンソン、シエリグン等の肖像畫をも收めたり。北歐人種の性情を靈活の筆に寓したるルウベンスの傳記と作品とを評論したるは、翰林學士エミール、ミシユルの手になり、同班の學士ウウシェン、ミンツはラファエルロの畫を評論して、稍衰へたる此大家の名聲を保持せむとす。叙述の序、ベルシノ、アンシエロ、グラマンテ等の事に及び、法王レオ十世の生涯をも説きたり。二書共に名畫の縮寫を挿みたれば、美術史研究者の好同伴とするに足る。

### ラスキン略譜

ラスキンが五拾年の評論は、其梗概を傳へ、其感化を蹤づくるのみにて

も、優に一篇の長論文を要すべければ、茲に、略譜めきたる小傳を掲ぐ。  
この人商家の子なり。千八百十九年二月八日倫敦に生れぬ。幼にして、早く既に、自然の清興を愛し、其秘事を窺はむとする情切なりしが、家庭の教を辭し、富有の資産に據りて、大學に遊ぶころは、ひ、身は益々文藝の堂に近けり。彼が贊を執りしは、オックスフォード、クライスト、チャアチの發なりき。千八百三十九年募に應じて、英詩 *Sulsette and Elephanta* を編み、ニユウデイトの賞を享く。漸くして後素の道に入り、フイルディ、ング、ハアディングの二師に學べり。學士の稱號を得たる翌年、千八百四十三年、近世畫人論初卷の著あり。タアアアを中心としたる英國風景畫家の評論にして、美術界當年の風潮に反抗して所謂古畫大家のわながちに尊崇すべからず、後人の製作に自然の清新なる妙趣、色彩の細微なる諧調ありと唱へて、いたく藝苑の視聽を動かし、辨難の聲、贊嘆の辭

争てこの青年評家の上に加はりぬ。年少の容氣、或は激越に失する嫌なきにあらぬと、沈滞せる當時の藝術界を勵して、自然と直接なる交通を得せしめたる功績は、没すべからず。加ふるに文辭の莊麗多彩なるひとり藝術の士を動かしたるのみならず、一般文界の驚嘆を招ぎぬ。後、南歐の觀光は、其見識を廣め含蓄を豊ならしめしつまなりければ、近世畫人論第二卷は漫遊の後に、更に伊太利亞大家の作を評すること詳に、愈々文藝復興初期の美術を愛するに至れり。此書漸く積みて四五卷を爲し、六十年より六十七年に至る間、著者が精密の改題を経て今日の形を定めぬ。

六十七年選まれて、ケムブリッジ大學、リイド講演の坐に就き、法學博士の號を受く、六十九年、オックスフォード大學美術講師の職に選ばれ、七十六年再選の榮あり、八十四年三選せられて講演を開くに當り、大衆の熱意驚

くべかりしといふ。晩年静養してコンニストンの墅に隠れ、文壇の老将として、一世の尊敬を受けしが、千九百年一月二十四日帝郷の人となりぬ。

ラスキンは頗る多作の人にして、其著ひとり文藝に限らず、政治、經濟、哲理の問題にも及びたれば、今はたゞ其著るしきを擧ぐ。

Modern Painters, 1843-60; The Seven Linnys of Architecture, 1849; Pre-Raphaelitism. The King of the Golden River, 1851; The Stones of Venice 1851-53; Lecture on Architecture and Painting, 1854; Elements of Drawing 1857; The Political Economy of Art, 1858; The Two Paths, 1859; Unto this Last, 1862; Sesame and Lilies, 1864; The Echoes of the Dust, 1865; The Crown of Wild Olive, 1866; The Queen of the Air, 1896; Aratra Pentelici, 1872.

また老來自傳を編みて時々公にせしを Præterita といふ。上に擧げた

る諸書は、何れも藝苑の尙ふ所なれど、西歐美術史に詳しからぬ一般讀者にして、ラスキンが思想の一端を味はむとする人は、先年吾邦の諸學校に行はれむとし今は廢りし Sesame and Lilies より始むるもよからむ。唯 カムハニヤ 原頭落日暮雲の趣を盡したるか、雲の説の如き絶妙文辭なきを如何せむ。ラスキンの文、彩多く、章長けれど、晦澁の弊なく、流麗にして寧ろ平易なり。若し解し難きあらば、そは著者の罪にあらず。

## 英辭書の古今

英辭書古今の變遷發達を詳説しうべき適任者は、新撰英辭書の編纂長マレイ博士を措て他に求むべからず。この頃例のクラレンドン印刷部は、博士が講述の小冊子を上梓したれば、之に據て其梗概を傳ふるに共に、新撰英辭書に就て、いさゝか述ぶる所ある可し。博士は英辭書發達の歴史を十四項に別ちて一々例證を擧げ、詳説を附して今日の完成に到達せる経路を明にせり。

(一) 基督曆紀元七八世紀の交は、書籍殆ど全く羅句語を以てしたれば、學僧が研究の途次、難解の字句に會する毎に、原文の肩、上、細字を以て英語若しくは簡易なる羅句語を附記せり。記憶の便に供せしこの所謂假名附はやがて後世辭書の源となりぬ。中世の羅句寫本を閲するに

假名附を有するもの極めて多し。旁訓 *Paraphrasen* 即ちこれなり。

(二) 學者はこの旁訓を便とし、これが蒐集に従事して「旁訓書」*Glossarium* 又「字彙」*Vocabularium* を編纂せり。

(三) 是に於てか索引の便を思ひて、此等旁訓書、又字彙中の各語を字母の順に排列するに至りぬ。英國に編纂せられたる旁訓書の重なる者は *Leiden, Epinal, Erfurt, Corpus (Cantab.)* 本等なり。

(四) 此の如くして紀元十一世紀に至る迄、羅英對譯字彙の編成諸處に起り、同意語、類字を附記して益、豊富を期せり。

(五) 然れどもノルマン征服以後、殆ど三百年の間は國語の勢、頓に滅じ學藝また暫らく英人の掌を放れたるに由り、辭書編纂の業、中絶の姿なりしかど、後文藝復活の機運動くとともに、數多の字彙相接して現はれたり。 *Wynkin de Worle, Orinus Vocabularium*



最も著はる。既にして英羅對譯辭書の必要起りて *Promptorium Parvorum, or Children's Repository* (1410) の書出でしは記憶すべき事實なりとす。  
(六) 文藝復興期に及で、羅英字彙の需要益、生じ、千五百三十八年サアトマス・エリオット *Sir Thomas Elyot* の「羅句辭書」*Latin Dictionary* 千五百五十四年、*ワイル* の「初學小辭書」*Wihul, A Short Dictionarie for Young Beginners* を以て好著とす。

(七) 千六百十一年は辭書の歴史に於て記憶すべき歳なり。コットグレイヴ *Randall Cotgrave* の「佛英辭書」*フロリオ* *John Florio* の「伊英辭書」時を同しして現はれ、今に語源學者等の参照たるを失はず。

(八) 而して千六百四年版 *コオドレイ* の「字母排列難語表」*Robert Cawdrey, Table Alphabetical of Hard Words* 千六百十六年版 *ブロカア* の「英語註解」*Dr. John Bullokar, English Expositor* は近世英辭書の萌芽と稱すべし。

(九) 千六百廿三年 *コ克蘭* *Henry Cockeran* の「英辭書」に始めて *The English Dictionary* の稱を用ゐたり。此書は難解拮据の語に富み、今は廢語古語として滅びたる奇怪の辭を含めり。 *abrogate* 「羊群より導き出す」 *accracco* *nic* 「調髪せざる人」 *halbulitate* 「牧童の如く呼ぶ」 *adecorporated* 「結婚する」の類なり。當時の弊習として凡人は先づ日用の言語もて自國文を草し終り、辭書の助を假りて故らに難澁の羅句めきたる語に書き變ふること例へば *He and I are of one age* を *We are conincents* と直す如くなりしかば、英辭書も自ら文字に爛はざる徒の手引草たるを目的とせり。

(十) 爾後出版の英辭書は規模漸く廣く、調査もまた嚴密を加へ來て、江湖を益すると少からず *Blount, Glossographia* (1656) *Nathaniel Bailey, Universal Etymological English Dictionary* (1721) 等殊に持囃されて、版を重ねること數回、特に後者は千七百卅一年版に「アクセント」を附したれば、今日の發音

標示に向て一步を進めたるものと稱すべく、サア、ジョン、ホオキンズの説に據ればジョンソンの英辭書稿本は、ベイリーの各頁に白紙を挿みたるものなりと云ふ。

(十一) 千七百五十五年も亦記憶すべき歳なり。永らく書肆の企圖して終にジョンソン Dr. Johnsonに編纂を託したる「英辭書」こゝに完成せり。  
(十二) 千七百九十一年版ウォーカー John Walkerの辭書に於て發音法、規定せらる。

(十三) 十九世紀に及びて米國は好辭書を出せり。されどエラスター Websterは釋義に長じて、語源に短あり、リチャードソン Richardsonは引證豊富なれど、釋義精しからざるを憾とす。

(十四) 千八百五十七年、英國言語學會に於てトレンチ博士が世上に流布せる英辭書の缺點を論じ、在來の書が各語の歴史を顧みず、又廢語古

語等を棄てたるを説きたるに因て「新撰英辭書」A New English Dictionaryの大業は起れり。

以上マレイ博士の述べし如く、幾世紀の發達を歴て終に今回の大著を見るに至りしは、眞に英國學界の光榮なれども、此大辭書は編纂着手以來、鉛筆に付するまで種々の難關を経たる也。トレンチ博士の所説は素より語學者の熱心なる賛成を博したれども、當時の大學はなほ未だ希羅の死語にのみ重を措て重要なる自國語の研究に力を傾けざりければ、編輯印刷其他の要件に就て、冷淡なる態度を執り、充分の補助を與ふる事なかりき。されば辭書印刷の業をケムブリッジ大學に囑せむとせしも、体よく謝絶せられ、オクスフォート大學も始めより熱心を以て此大業を負擔せしに非らず、唯マアク、バテイソン氏、スタップス博士等の辨明に由り終にクラレンドン印刷部の業たらしむるを得て英國學界の不

名譽を救ひ得たり、此間數十年當事者の勤勉に怠りしといふにあ  
らねど、トレンチ博士の歿後、編纂長たりしハアハート、コウルリッ氏幾  
もなくして逝きしかば、重任はフアニブル博士の肩上に落ちしも、公衆  
の視聽既に茲にあらず、世上の注意全く衰へたれば、失望の餘、博士は稿  
本材料を集めて悉く大英博物館書庫に獻せむと思ふまでに至りしを、  
今のマレイ博士がヘンリイ、ブラッドレイ氏と共に之を承くるに際し、機  
運漸く熟してオクスフォード大學の容るゝ所となりぬ。

是に於てマレイ博士は千三百名の調査員、三十名の編纂員を置き、十二  
年を以て完了せむと期せしが幾もなくして、誤算なりしを認めたり。  
先にジョンソンは三年を期して其辭書を完成せむとせり。而も終に九  
年を費しぬ。エプスタアは二十有四年の勞を執りしに非らずや。  
精覈を主とする今日の語學者より觀察すれば、素よりジョンソンの辭書

は批評を免れざれば、彼は終に辭書編纂の大家たるを失はざるなり。  
而して其書の博く信據せられたるは、新撰英辭書着手の當初、彼が引證  
とあれば校合なくして轉載したるを以て證とすへし。されど事實彼  
は時々不精確の缺點ありて、或は引證の辭句を變じ、或は著者の名を誤  
る如き短處あるが故に、今日はジョンソンの言と雖も、一旦源泉に遡りて  
驗證せずむは已まず。又彼は往々辭句の定義に滑稽を挿み、揶揄穢弄  
の癖あり。例へば Grim Street の條下に「倫敦の町名、小歴史、小辭書、韻文の  
作家が住する所」Lexicographer の項に「辭書を作る人、害なき腰辨當」と註す  
る如し。又 Out を釋して「英國にては馬の食物、蘇格蘭にては人間の食  
と解せるは、蘇國人ならぬ讀者に取りても少々迷惑なる定義なるべし。  
然れども少額の報酬を以て辭書編纂の難業を完うしたるジョンソンの  
勇猛心こそ永く感歎を値すべけれ。千五百磅の原稿料より、彼は六人

の助手に相應の俸給を分ちしなり。而して平素蘇國人を嫌ひしにも拘はらず、六人の中五人迄其地方の人なりしも一奇といふべく、ガッファスクエアの一室に六人の助手机に對して執筆する間、ジョンソンは一段高き机の中央に上りて監督せりといふも滑稽なり。

ジョンソンのガッファスクエアに比すれば、新撰英辭書編輯所は實に霄壤の差にして、かれは影黒き階下の一室、これはオクスフォードの北面に當る爽快なる廣邸なり。辭書の校正紙は邸後の書庫に堆く、鐵造の編輯室即ち *Scriptorium* と稱するには、大小の廣机、規則正しく整列し、壁に沿ひたる數千の小棚には紙片充滿せり。而して此紙片は各必らず五名の助手を経たる後、他の四名に依て分類配列せらる。引證の文辭を録したる此等の紙片は百萬枚、約一噸の重量ありて、今殆ど六噸に達し、一枚一分の速度を以て閲覽すれば、三十年にして悉皆讀み盡し得べしとい

ふ。而も此辭書の頁數にも始より若干の制限ありて、此六噸を悉く印刷するにあらず、重要なるを選出して約百萬枚のみを採用す。勞苦是に於て一段を加ふ。

此紙片は世界の各地より、即ち佛蘭西より、フロリダより、アルゼリイ、アムステルダム、埃及、ストックホルム、羅馬、フイレンセ、日本等より熱心なる通信員の送致せるものにして、初期の調査員中には高名の人少からず、即ち ロセッテ、ハズリット、ラボック、ライトフウト、クレイク、ドウドン等を交へたり。要するに十萬卷の書籍を讀破して引證の文辭を抄録しぬ。言語學會より マレイ博士に寄送せる材料を點驗種別するのみにても、二名の助手一日八時間勤務して優に三年を要せしといふ。始め字母の數に應じて廿六名の編纂員を置きしが、數十年の間始と半數は他界の人となりぬ。されど爾後、遺族、受託人は引證の紙片を筐底

に發見し、提鞆より搜出し又は屋根裏、酒藏、箆筒より得て、木箱、竹籃、搖籃等種々の入物にて送致し來るもの噸を以て數ふべく名詞の提鞆あれば、動詞の箱もあり、接續詞の束も、形容詞の小包もありて、一日到着したる舊き搖籃の内には八品詞の上に鼠の巢へるを見たりといふ。又Paの部は擔任の編纂員と共に何れかに埋没して久しく消息を失ひしが非常の困難を盡し、やうやく足跡を追求して最後の住居地に至りしに、彼は其僻色に歿して稿本のみ室隅の棚に存せりとぞ。

是等の熱心なる編纂員、調査員等は勿論何等の報酬賞與もなくして獻身的補助を供したるなり。されどかゝる熱心家にもそれらの短處はありて或る人は最初に非常なる勤勉を盡す可しと豫約して終に何等の補助も與へず、又ある人は車輪になりて、山なす材料を寄送したれど不精確其他の源因に由て大約徒勞に屬せし如き例少からず實力あ

る知名の文士といへども引證の文辭を正確に抄録し、原著者の姓名をだに誤なく轉記し能はざるもありきといふ。而して各員の勞力の比例も可笑しき迄に釣合はず例へば三十六萬一千枚の内一萬九千は一人より一萬一千は他の一人より一萬は第三の一人より來りしが其年の調査員は總計七百名なりしが如し。かくて此等の調査員等と文通するのみにても仲々の用事にて毎日三十乃至四十通の書信を發せざる可からず、要するに此大辭書編纂に關係せし人員は二千名に上れり。此の如くにして「新撰英辭書」は數十年の歲月を経て今漸く出版の半を終り、千九百十年の交を期して完了せむとす。此間好評は語學界にのみ限らず、世上一般の注意を惹き起し來て、外國の學者も争てこゝに學ぶ所あらむとす。和蘭獨逸の辭書編纂家も亦これに激せられて、浩澗の著を編まむとし、瑞典の學界も先日人を派してマレイ博士等の編纂

法を研究せしめたりといふ。

### 批評家の任務(ブランダー、マシウ)

批評の始は疑もなく褒評にして、著作の缺點を指摘するよりは、寧ろ其美處を表彰したる者なるべし。只人間愛憎の情之に加りて悪意を挿むに至りしこと宛もプロクラストイズに邪念ありし爲め、靜寧の記標ともいふべき臥床を呵責の具に變じたる如しと。これは幾年の昔、英國詩人及び蘇國評家の詩又は評家シッフレンエがシモドハロめきたる峻酷の斷案に就て詩人ロングフェロウが感を述べしものなり。然れども吾等謂ふに此詩人の説も凡て騷人の習として餘に過去を理想化し過ぎ従て現在を貶すこと酷に失したるものにあらざるか。近世風俗の一般に柔和に趣きたると共に批評家の風習も大に革りたる事疑なし。まことに吾等の記憶するに於ては、古來批評といふ語は、おしなべ

てならずとも、多数人の耳には既に缺點の指摘と同意義なる如く解せられたり。されば今を距る殆ど二百年前の作「ファクアル」(一六七八—一七〇七)の「浮氣者」といふ狂言に「プレイイ」といふ男が或る婦を評して曰く、あれは貴方、批評家でさあ、で諧謔は大嫌だ、もし、ひよとして、それが面白いと大變だからと。

斯の如く批評家の位置が誤解せられたるは、もと自ら招ける虞なり。アアサア、ペンデンニスがベルメル新報の評壇を擔任して當年の詩人を品隲するや、宛も判事閣下が其面前に戰慄する被告人に對する「風ありき」といふ。此類の批評家は單に裁判官又陪審官となりて先づ始に作家を有罪と定め、これを刑場に送致するのみか、往々進で處刑執行者となり、自ら手を下して鞭撻を加へ、以て大に快しとするものあり。例へばかのカピテン、シヤンドンはワリントンが答の音と其傷とを知れり

といふ。ブラッダイヤは屠者の如し、其論題を殺戮し盡さずむは已まず、ワリントンは之に反して「手腕物凄きまでに鋭く、背後より浴せかけたる梨割の切先には、行毎に流血淋漓たるを見る」といへり。思ひて此事に到る毎に嘗て燃犀精緻なる米の一批評家が言へりしものを追懷せずむばならず。曰く世の人わが批評を目して嘲罵挑戦の風ありと言はざる限りは、如何なる品隲を受るも毫も疚しきことなしと。これある哉、まことに眞正の批評に非らざる者を言顯はす最も適當の語は、この嘲罵挑戦といふ四字なる可し。眞正の批評は秩序ある透察なりとはシュウベエル(一七五四—一八二四)の言なり。批評は作品を理解し説明せむと努むることなり。眞正の批評家は刺客にもあらず又處刑執行者にもあらず。彼は寧ろ預言者の一種にして邦土の探檢に送られたるものなり。若し好き音信を齎らし葡萄の房のたわゝ

なるを持來ることあらば、其時こそ最も世を益する者といふべけれ。  
愛なき批評は好尚を亂り趣味を害ふとこれ亦シウベエルの言なり。  
古來の大批評家一人として悪意を挿める者無し。麻克禮嘗てモント  
ゴメリイを痛撃して寛容する所なかりき。麻克禮が大批評家に非ら  
ざるは今更論するを要せずと雖も、會々此一事を以てするも其資格を  
欠きたることを證するに足る。戦斧と頭皮を切断する小刀とは斷し  
て批評の具にあらず。之をレシングの器具に尋ねてなくセント、ブウ  
グの戎器に求めて無し。マシウアアノルド(一八二二—一八八八)シイ  
ムスラッセル、ロウエル(一八一九—一八九二)共に此器を用ゐしことなし。  
文學に忠なる此等批評家の論議は會々他の缺點に説及ぶことあるも  
そはたゞ偶然なり。彼等は時として作家を流竄の刑に處するとあれ  
ども常に多くは之を祝福せり。彼等又始めより其批評の題材を精選

す。何となれば彼等は深く其論題を愛し之を稱揚せむとする熱意極  
めて切にして汎く其賞歎の理由を公示せむとを欲すればなり。識淺  
く才乏しくして而も學を衒らふ如き者前面に來る時はたゞ肩を聳か  
して黙するに若かず、これ上策なり。大批評家が身を下して、虚誕者を  
筆誅することは極めて罕なるものぞ。

レシングは美術の理論に關して論戰を爲しぬ。されど人身攻撃は爲  
さざりき。セント、ブウグは在りの儘に人物を描出し、所謂畫て黒子に  
及べる風ありき。されど彼が精緻なる批判の妙技を施すに値せざる  
庸俗は其顧みる所に非らざりしなり。マシウアアノルドは敵の甲冑  
の弱處を看破する慧眼ありき。されど彼が批評論集中一として其題  
材自身に津々たる興味を托せざるものなし。ロウエルは常に太く虚  
誕を嫌ひて輕蔑の色を其文に掩はず、往々痛快なる隻語を下して大打



撃を加ふる所ありき。されど凡庸作家何等の害を被らずして氏が評眼を発るゝ如き觀ありしは何ぞ、他なし。大批評家は此等斗宵の輩の淘汰を歲月に托し自ら手を下して濁流に染むるを欲せざればなり。ベントレイの言とぞ覺ゆし、人はみな自ら姓名を記せざる可からずと、蓋し自己の才幹を以てし、他人の推舉に依頼せずして不朽の名を後昆に傳ふ可しといふ意ならむ。

今は故人となりしエドワアル、シレルは嘗て手套を脱してエミイルツラと戦ひぬ。ショウル、ルメエトルも亦又其燦然たる妙文を以て甚くシアル、オオネエを攻撃せり。かくて攻撃の目標となりし二人の者これが爲に反て名をなしゝに非らずや。是に於てか双方果して幾何の益を得たる。シレルが貶評を被れる後ツラは十九世紀間の最も雄健深刻なる著作と稱せらるゝ其傑著「シエルミナル」を作りしと共に、世界文學中

最も醜汚なる小説「ラテル」をも著しぬ。オオネエに至りてはルメエトルが名文の痛撃反て世の同情を惹く種となりて、衆俗の眼愈々一身に聚れり。ルメエトルの痛快なる攻撃文を執て之をかのアナトル、フランスが婉曲にして滑稽を含みたるオオネエが評と比するに後者に於ては初め柔和紆曲の筆路より進で、不知不識の間全くオオネエが弱處を捉らへ終に如何ともする能はざらしめたる妙技却て讀者を首肯せしむるものあるを知るべし。

シレルは少し潔癖に過ぎ、性行亦峻厲の傾ありしが、なほ透察術味の才に富めり。これやがて批評家が最要の資格ならずや。ルメエトルも亦長劍を揮て戦を爲すを喜ぶと自白しながら、なほ滿腔の熱意を傾倒して他を賞歎し得る力あり、「近文評論」Les Contempains 第一集凡て十三種の批評を收む。彼が敬愛の心を除きて批判の利劍を揮ひしもの、僅

かに彼のオオネエ攻撃の一文に過ぎざるなり。抑も同業者の群中に身を投じて四方八方に切り廻るは少しく正氣の沙汰にあらず、否殆ど其反對なり。貶評は翫味より卑しく、純然たる破壊的批評は由來建設的批評より劣れるものなり。モリス嘗て名言あり、曰く劣作を嘲罵破却し盡して自ら快とする評家は幾もなくして自己の品位を傷く可し、これれのづら其從事せる職業の爲に感化せらるゝなりと。實に惡虫を壁に針して衆人の注意を促すは時によりて必要なことあり、かの麻克禮がモンゴメリイに於けるルメエトルがオオネエに對する僅に此理由を以て恕す可きのみ。而も十中八九或は百中九十九迄は當時の劣作に對する批評家の態度は純乎たる無頓着を以て最上の策とす。歲月は誤なく良著を留め劣作を放棄すべし。是故に批評家の任務に讀者の爲に良書を求むるに在り。これを選択

し理解し翫賞するに在り。第一に良著を選択せむとするには批評家たるもの先づ作品の最高なるものを固執して其妙趣を反覆詳論し一方に於ては古書の雅趣を常に清新ならしむるに注意すると共に、他方に於ては鋭敏なる眼孔を以て新刊の佳作を發見するに力めざる可からず。幾週幾月の間假令如何ばかり流行を極むと雖も單に一時にして消滅すべき無價値の著書は捨て、顧みざるを宜しとす。一時の人望が決して其書の眞價を定むること能はざるは極めて確なり。然らずむば Proverbial Philosophy, Light of Asia, Epic of Hades は ロハアト、モンゴメリイ以來の英詩中上乘なるべく、今日は誰も顧みざる *Lamp-lighter*, Ben-Hur, Mr. Barnes of New York の類は米國小説の文範たらむ。輕佻なる公衆が消閑の通讀に適當なる駄作と眞價ありて後昆に傳ふべき作品との間には劃然たる區別を立てざる可からず。眞正の文學と似而非

文學との間に横はる深淵を明に認めざる批評家は其任務の第一義を怠れるものなり。思ふに此區別差異を讀者に明ならしむる最良の方法は常に眞價ある良書を反覆細評して、かの謂れなく一時の名聲を博したる劣作を知らぬ振りして評せざるに在り。

然れども單に一國文學の既に古典となりし昔の傑作をのみ繙讀して其妙趣美所に心を奪はれ終に當代の作品に盲なるもの亦批評家といふべからず。苟くも批評を物して衆人に示さむとならば自ら酣闘の中に下りて戦ふべきなり。吾等が祖先より傳來したる詩文に疑もなく祝福せられたる遺産なれども今代また數種の良著なしとせず。採て以て吾等が子孫に傳ふ可きにあらずや。或は亦吾等の子孫既に早く黒白の彩色を以て人生の感慨を描出したるもの、中巧緻眞摯をさるる前代傑作の壘を塵したる者必らずしも乏からず。セント、ブウヅ

曰く批評家が眞正の凱歌を揚ぐるは其嘗て獎勵保護したる詩人が漸々長じ來りて曩に批評家が烏帽子親となり元服を命せし折の願望を充し或は之に超ぬたる發達を遂げたる時にありと。古の名著を評釋する時は勢、精確、沈靜、深遠に傾くものなれど、なほ其他に輕快靈活の批評ありて當代の精神を發揮し時勢の要に應ずること反て切なるものありとはまたセント、ブウヅの言なり。此種の批評には豫め一人の主人公を設け感情的文字を羅列して傍人の驚愕をも顧みず太膽にも天才、名譽等の美辭を用ゐるを吝まず。

歌軍の庭に戦はむとて君は槍をとれ、われは馬をひかむ

蓋し拜クトル、ユウゴオの如き大詩人の始めて世に出づる時に於てすら其秀拔雄渾なる抒情詩的技倆を看破して未來を預言し得るは尋常批評家の企及ぶ所にあらず、ひとりセント、ブウヅは「秋葉」の評に於て前

記の批評法を揚言したるなり。然れどもセント、ブウヴの透察なく素養なくして徒らに其譽に倣はゞ反りて思はざる失敗を招ぐに至らむ。ロングフォウが批評家を以て文士大軍の中、新聞雑誌の邊隅に於て新進作家等を誰何する歩哨に譬へしは全く首肯する能はざれど兎も角、始て文士の軍隊に入營せむとする者の證明書を検査するは兵士たる批評家の任務なる可し。

まだロウエルが米の星使となりて聖惹斯の宮廷に來らざりし前の言に曰く英國の批評は多少地方的にして、終に眞理の永遠なる事を認めず、四季評論及び海陸軍の助力なくも獨立し得べきを識らざるが如しと。爾來英國の批評は其面目を一新して稍々地方的なるを免れたれども、今日の弊風は悉に世界主義の假裝をなすに在り。今日と雖も少しく文學の趣味を解する米國人士は、アゼニヤム「アカデミー」スペク

テイタア「土曜評論」の評壇に米國の僞版者と雖も資を下して翻刻するを肯せざる拙劣の小説を評したる文を見る毎に、喫驚せすむばあらざるなり。例へば *Rita*, *The Duchess*, *The Authoress of the House on the Marsh* 署名する女性作家の駄作を賞揚したる評論の言の如き、これ殆ど批評の名を與ふ可からず。趣味の缺乏にあらずして何ぞ。而して此等の批評をのみ購讀する人々は終に英國今日の小説が昔日の姿を止めず佛蘭西、西班牙、米國の小説に劣ること遙なるを知らずして終らむ。第一流の作品の批評にのみ使用すべき文字を以て第二流或は第十流の劣作に加ふるものは批評家第一の任務を忘却したるものなり。即ち讀者の爲に最良の書を選ぶこと能はざりしものなり。即ち批評家第二の任務も亦第一に似たり。即ち讀者を助けて最良の書を理解せしむることなり。世上幾多の書籍中特に之を明解して輕卒な

る通讀者にも會得しうるやうになす可きもの少しとせず。今日の如き煩雜の世に於ては此種の讀者最も批評家の助を要す。高等の作品中二三のものは尤も最高等の著作には決してかゝる事無かれと批評家の解説の爲に益するものあり。而して最高の良著は注解叙述の助なくして明瞭なりといふは過言の如くなれと然らず。自ら具れる美處は何人の心をも動かすものなり。されど古來より賞歎玩味せられて吾等居常これに慣るゝを以て輪廓鈍りて其銳利を失ふが如き觀なきにあらず、其始めて世に出でたる時の如く人心を動かす能はざるに至らむとするは自然の勢なり。されば批評家の任務は一時色褪せ花萎める如きものを復活せしめて其永遠に清新なるを示し、以て古書が今代に齎らす天職の本意を明にすべきなり。既に讀者を助けて良書を選択し之を理解せしむ。是に於てか批評家

第三の任務は讀者を導て之を翫賞せしむるに在り。これは批評家自身の商品を賞歎する情熱心にして他人を感化する力ある時にのみ始めて望む可きものなり。いかに學識該博にして評眼銳利なりとも温籍なる同情力と賞歎力となくむば未だ完全の批評家といふ可からず熱情他を動かすこと能はざる批評家は其意見を傳播する力を欠きたり。其判定斷案假令いばかり秀拔なりとも其影響は終に消極的たるを免れず。一穗の燈火能く十里の遠きを照らすにあらずや。他人が作品に深く感動し而して其賞歎快樂を矯飾なく卒直に揚言するは真正の批評家が二大資格にして此点殊に似而非批評家に欠乏す。セント、ブツウ、マシウ、アアノルド、ロウエルが己を悦ばし、詩歌の著者を稱揚したるを見よ、又いかにヘンリー、シイムス、ジウル、ルメエトルがドテエ、モオバ、サンの文才に感じたるを思へ。

批評家もし讀者に任務を盡したらば作家に對しても既に充分の義務を果したるものなり。批評家は公衆の爲に存し個人の爲に存せず。凡て美術の作品は其詩歌なると戯曲なると彫塑繪畫なるとを問はず、完成の後に非らずむば批評家の眼に觸れざる故、其議論は毫も作家を裨益することなし。美術の作品が公衆の前に來るは既に竣工の後にして作家が後日之を變更すること極めて稀れなり。之に反して科學的著書は其基礎とし其敘述せる事實の正確に重を置くものなれば批評家の注意に因りて益する所多く史學法學の書類には各科専門學者の注意に因りて版一版と改善訂正したるもの少からず、コラムピヤ大學の「政治學雜誌」又「英國史學雜誌」の如きは此種の精評の模範にして簡約明潔能く肯綮に當り、各科専門の大家之に署名す。然れども美術の作品は全く科學的著述と撰を異にして批評家が作家

に對する任務はたゞ公平なる批判を下して紹介稱揚の價值あらばこれを公衆に推薦すべきのみ。小説といひ詩歌といひ、一旦製作し終りては如何ともする能はず、批評家は個人としての小説家詩人に對して寸毫の助言忠告をも與ふること能はざるなり。故に經驗ある美術家は批評家の言を以て其作品に關係なきものとし、たゞ公衆に對する位置聲望を變更するに力ある聲と認むるに過ぎざらむ。試みに批評家の爲に金科拾二條を掲げむか。

一、正直なる説を作れ。

二、之を正直に述べよ。換言すれば批評家第一の任務は批評なり。

三、眞面目に讀まざりし書を評する勿れ。

四、同情を寄すること能はざる書を評する勿れ。身を作家の位置に置て著者の見地より其書を眺むれば必らず其美處を發見す可し。

五、原文を離るゝことなく、眼前の書を評して横道に入る可からず。冗漫舞文の弊に陥るる勿れ。

六、紛はしき見本を出す勿れ、即ち局處の美を以て全篇の欠點を掩はむとする勿れ。

七、傳紀歴史の批評に於ては眼前の書を離るゝこと無く、決して自己の論文を縷述する勿れ。

八、小説の批評に筋を載せ梗概を掲ぐることを勿れ。小説家に對して是程禮を失したることあらず、讀者の快樂をも害するものなれば公衆に對しても不親切なり。

九、成功したる作家を剽竊家といふ勿れ。成功したる品中に剽竊したるものも多かる可けれど、剽竊のみにて成功したる者はなし。

十、蝶を殺すに車を以てすべからず、價值なき書は評するに及ばず。

十一、東北の寒風林檎樹に鳴る如き酷評を試る勿れ。徒らに他人の感情を害し面白からぬ思をなさしめたりとて何の益ぞ。

十二、批評家の任務は主として讀者に對する邊にあるを忘る可からず。單に善良なる書を讀ましむるに止らず、進で最高等の作品に導かざる可からず。只記せよ時文の三分はたゞ時文にて終る可きを。

選擇理解、翫賞これを批評家の三大任務とす。

○フリードリッヒ、ニイチエ

(アンリ、リヒテンベルグ)

フイマルの幽静なる閑窓に、多恨なる薄倅の一生を結びけるフリードリッヒ、ニイチエの運命こそ奇しくも亦著るしけれ。千八百八十八年の交までは、殆ど大衆の顧るなく、唯二三の俊秀、佛蘭西のテエヌ、唵馬のゲオルグ、ブランデス、瑞西のヤコブ、ブルクハルトの如き認められたるのみなりしを、千八百八十九年の初、全く心神を迷朦ならしめし狂疾彼を襲ひぬ。時宛も半生の教説を綜約したる「價值變價論」の大傑著に最後の筆を下さむとするに際せり。此間彼が思想漸く想界に傳播し來り、著作亦天下を風靡して、歸依の人日々に其數を増し、名聲たゆみなく一世に馳せぬ。されば、超人の預言者、ザラトストラの詩人が、其名の周に起れる

喧囂を知らで、徐に死に近づきつゝある間、世は彼を講し、彼を頌し、彼を是非して熱冲を極めたり。或ひとは、彼を目してシカメンハウエル歿後、獨逸の生みし最大の思想家、一新宗教の開祖とし、其深く人心に曉通せると共に、人間精氣の鼓吹に偉大なる勢力を逞うせるを讃むれど、或ひとは之に反して、彼の著作を貶し、精神錯亂の人が物狂はしき幻想を恣にしたるに過ぎずとし、又は假借なく彼を目して、近代澆季思潮の最も危険なる代表者也と斷す。即ち輓近歐羅巴に於て、一種毒血の如く凡ての方面より社會の組織を解散せむとする智徳の無制度説を鼓吹する者とす。謂ふに今はニイチエ作品の價値を論じて終極の斷案を下すべき時に非らじ。此方向に於て、吾等の爲す可き凡ては、彼が哲學の根本的傾向を標榜して、さしも當代の民心を誘惑し、熱冲せしめたる其思想と人物とを表現するにあり。



抑も當代を聳動せし彼の學説は、其消極的方面にあらざりき。げにわれらの世紀末が、懷疑厭世の思想に深く浸潤せられたるは否みがたき事實にして、此等の點に於てニイチエよりも歩を進めたる者少なしとせず、數世紀このかた、哲學も、科學も、人格の神、最始の因、宇宙の第一原動者に就て疑を挿み來りぬ。——ニイチエ乃ち傲然として神の死を揚言し、萬の神學、萬の宗教の恢復し難き必定の倒産を公にす。又プラトオンよりカントまで凡ての哲學者は示すやう、吾等は感覺理性の形式を離れて、物象それ自からの外形的實體を知る能はずと。——ニイチエはなほ遙に進みぬ。乃ち表現界に實在界を對し、現象を離れて實體を設くる觀念をさへ駁撃して曰く、吾等は認識界外、再現の圈外に或物の存在を確言し又思惟するさへも能はず。所謂實體とは生ける神といふ觀念の微弱なる形而上學的反應に過ぎずと。吾等の世紀はまた二個の確言

を有せり。義務良心の絶對的價值に於ける信仰と、智的誠實は眞なりといふ絶對的價值の信仰となり。——ニイチエ乃ち此等二個の價值表に議を挿みぬ。曰く人生の發展繁榮の爲めには、即ち人類と稱する植物が美しく健かなる嫩枝を生せむが爲には、惡も善と同じく、眞も虚と等しく必要なり。世の常に、惡として類別せらるゝ殘忍、憎惡、暴虐等の欲情も、人類の發展には頗る緊要にして、有名なる道徳、即ち善行、哀愍、謙讓等と同じく偉大なる効果を有せり。惑迷と雖も、亦人生缺く可らず。これぞ有益の錯誤なる、救済の虚誕なる。これ無かりせば、如何なる有機體も榮ゆる能はざりけむ。されば活力の能ありて、衆生を包圍する惑迷の織緯をたぬす鞏固ならしめむとはすなり。而して之れを斷破せむとする哲學者は、かの女神マイヤの面怕を剝がむとして實は生命の死滅を促す虚無論者なる可しと。之を總ふるに、ニイチエこそ凡ての

方面より論じて、一大虚無論者なれ。彼は今日まで人類を支持安慰し來れる凡ての信仰を破棄し、人間が神といひ、天といひ、善、美、理想等種々の名稱を以て尊崇し來れるものを否定す。彼亦同時に厭世論者なり。彼の眼に映ずる人生は惡にして苦患に捧げられたり。幸福は人間望みうべきものに非らず、彼の眼を以てすれば、歴史は暴虐にして厭惡すべき無意義に過ぎず、文明とは無産の群衆を不幸壓制に投じて少數選民の繁榮幸福を鞏固ならしむる暴政の一種なり。苦患も亦惡の如く誕の如き人生の根本的要素にして、此要素を禁遏せむと試むるは無用にして且不倫の業なり。何となれば、それは幸福と同じく又はそれよりも多く、人類の莊嚴に資する所なればぞ。

かゝる條件のもとにニイチエの論結は如何。彼はシホエンハウエルの如く、ハルトマンの如く、涅槃を翹望せむとするか。あるはゲエテのメフィ

ストフエレスを學で萬象生れざりしこそよからめと揚言し、煩惱厭離しつべし、生存の意志を心中に殺せよと勸告すべきか。——あらず。ニイチエの獨創なるは、此虚無論より積極哲學を抽出し、此厭世觀より高峻壯大なる一種の樂天觀を迸發せしめたるに在り。險を探る豪宏彼の如きはまづ恐なく虚無論の暗黒に自ら投じたり。敢て凡儒を學で歩を廻らさむや。彼は終に其疑團を默せしめざりき。彼は終に存在の悲愁に冥せざりき。彼は終に安慰の臆説を捉へざりき。況や救濟の信仰をや。撓み難き論理、究智本能の制し難き誠實に彼は驅られて、其の推理の終結に至らずむばしませず。かくて懷疑絶望の迷宮に降り、地底遠道の終解拆究理の末、彼は世を終るまで眩みたる一點の光明を認めたり。厭世虚無論の説かくの如くにして、喜悅、凱歌の頌に變じぬ。何によりて人間の一生を量る、あるは人類一般の生命を量るべきぞ。

ニイチ<sup>ニ</sup>以前大半の思想家は、量度標準を人間以外に求めたり、即ち最上の價值として、神明、善、眞等を探りぬ。されば人生の價值も、其神に捧げられたる度、或は善美等を現實にしたる度に從て量らる。換言すれば、與へられざる目的を人間に強ひたり。彼等は一箇の理想を標置して之を現實にする能はざるを以て人生を難せむとす。——されどニイチ<sup>ニ</sup>に據ればこれ大に錯てり。曰く人生は辯護の要なし。病者廢人薄命の徒、不幸の徒、墳墓に曠がるゝ者いかに多きや。これよりも合理なるなく、これを越して善きはなし。世界は死亡消滅に對て熟したる人間に充滿せり。此の如きをして早く死なしめよ。彼等をして倒れしめよ。必要あれば彼等を撞き落さむもよし。而して心身兩つながら健全強壯の人をして生存せしめ、漸次富瞻熱烈の一生を營ましめざる可からず。彼等は自己の外に法なし、自ら價值の創造者なり。宇宙は未

だ形を成さざる一團塊にして、虚心の材料無意の混沌たるに過ぎず。たゞ人のみぞ、天才の個人のみぞ、自ら價值を定めて人間に關はる世界を造り、自ら責任を持して人生の見地より諸の思想の價值を心かきなく試験し、任意に己が善、己が美を定むるなる。吾等が據て以て人生の評價を定むる最上の價值は、終に自己の外に求むべからず、吾等自ら創造せざる可からざるなりと、ニイチ<sup>ニ</sup>が、*ゴザラト*の散文詩に、超人といふ詩的象徴を以て言顯はし、ものこれなり。超人とは古來の價值表より解脱して、自ら價值の創造者たるを自覺して、自己の將來を最上の天則と定たるものなり。ニイチ<sup>ニ</sup>教ふらく、神は死せり、どこしへに死せり。されど超人は生きざる可からず。虚無の説を脱れむ爲には、人自ら己の造化的豊穰を自覺せざる可からず、人生に意味あらしめむ爲には、充分なる活力と勢力の意志とを發見するに至らざる可らずと。

——同じやうにしてニイチエは厭世觀を脱しぬ。人曰く人生は惡なり、厭離しつ可しと。誤てる哉、人間は苦患を恐れざる勇猛の動物なり。必らずしも幸福を追求せず、幸福のはか求むる處なきは英人のみと、ニイチエはいふ。人は安じて苦患を受け、又時には其何故に苦むかを知らば、再び苦患を求むることさへある可し。かくて人もし自己の豊穡を知り、價値の創造者たるを思ひ、生死を賭けたる偉大の博奕を運命と共に試むる豪膽の賭博者なるを自覺し來らば、既にして其命に安じ、漸くにして之を樂むに至らむ。ニイチエが更に一の詩的象徴を設けて言顯はしたる永劫輪廻の說これなり。曰く或はれもふ世界は環の端なきに似て、どこしへに新しく始るならむか。或は謂ふわれ既に無窮の生を閱すなるか。或は謂ふわれまた當來無窮の生を閱すならむか、天に安せず命に背く者、わが生を誼ひながら恐ろしき命運を永遠に繰返す

べく宣告せられたる者にとりては、いかに恐ろしき思想なるべき。されど超人の眼を以てするに、何等崇高の觀想ぞ、彼はどこしへに若く豊かなるわが世の極みなき莊麗を樂み命運の愛を覺えて、ザラトウストラと共に、永遠やわれ爾を愛すとぞ叫ばむ。超人、永劫輪廻の半ば神秘めきたる思想は漸次充進し來れる熱冲を以てニイチエの心を充しぬ。多年の痼疾神經症の爲に世と遠ざかり、千八百七十六年よりは飄遊の生を送るの止むなきに至りしかば、獨逸、エンガデイヌ、伊太利亞南歐沿岸をさすらひつゝ、孤思愈高く沈想の夢幻を馳せめぐりてわれとわが心の宏壯なる詩歌に酔ひたり。漸くにして己を價値の創造者と思ひ來りぬ。即ち有益の惑迷を全歐に與へて、二千年の久しき之を活かしたる基督かれ自らの繼承者にして同時に最上の法敵なりと信するや……忽然として頭暈かれを捉へ、永く避け得た

る狂疾は襲ひ來りぬ。かくてニイチエは深潭に投じ了ぬ。病にくづを  
れし日ブルドオ氏に贈りたる消息に曰くわれは基督ぞ、基督みづから  
ぞ、磔刑の基督なり。

爾後十二年、母と妹フェルステル、ニイチエ夫人とは懇篤なる看護を以て  
不治のニイチエに冊きぬ。まことや恐ろしき運命なれど、また一種悲壯  
なる偉大と、心慰むる憂愁となきにしもあらず。恐らくは此緩漫なる  
苦悶は彼が教説を眞の光に照らさしむるに力ありしならむ。ニイチエ  
にして、若し揚々たる剛健に傲りて心身の強壯自ら恃む如き超人なら  
ば、われら恐らくは其教説に對して自ら反抗の念を覺え、勢力成功の暴  
戻なる辯護を厭ひ、弱者癡人に對する無慈悲の冷情、凡ての理想説に對  
する猛烈の蔑視を斥くるに至らむか。苦み惱むことニイチエの如くに  
して、始めて其教説を述べ而も無情冷刻の非難を蒙らざる權利あらむ

のみ。ニイチエが無神説の後に、いかばかりの宗教想ありしか、其無道徳  
説の裡にいかばかりの高峻なる徳性ありしか、其激烈なる虚無説の下  
にいかばかり熾熱の理想説ありしかを覺知し得るは、全く彼が、稀に人  
のすなる如く、苦患といふ淨情の浸禮を享けたるが爲なり。されど幸  
にして疾病は彼が天成の品格を貶すこと無かりき。親近の者いたく  
これを喜びぬ。二年の前われ曾て彼を訪ひしに、悲愁痕深き高容の表  
情未だ全く消磨せず、眼は内心に向ふが如くにして、物とは無き靈火の  
夢幻に迷ひ、病の椅子に倚りて、遠くテウリングンの丘陵を望み、足下落  
日の光あびたるブイマルの街を眺めて、漸くにして其疲れたる眼をど  
こしへに閉づべき寂滅の大夢を待ちつゝ、沈想の姿たとしへもなく靜  
なりき。

## 悲 哀

(エミール・ゼルハレン)

われ今茲に一小論文を提げて一情想の發展を討ねむとす。悲哀の情想これなり。悲哀は憂愁の一種に屬し、なほ精しく理らば、その特殊なる表彰なり。而してこの情想とこしへに人の熟慮を迫りて已まず、いづれの哲學も實に根帶に於て、これをしも其有力なる動機となせばぞ。

金石本草の二界を無意識にして過ぎ、轉じて有情生物の界に入るや、萬有忽然として變化す。是れに於てか、擴りて有理の意識を生ず。再轉して人界に投ずるや、この時終に心性あり。故に曰く人は心性ある生物なりと。

哲學は思索的生物が、生死の冥想に由て、憂愁を覺ゆるに基因す。この憂愁だに、なかりせば、誰かかの「あなた」を思ひ煩はむ。金石本草は幸なり。熟想かれらに何の益ぞ。

これを醫家に聞く、悲哀はたゞの疾なり。歪みて擴れる神經錯亂の本にも、もの憂く趣なき鬱憂の繁茂したるに過ぎず。或は歇私的利亞、或は瘋癲の一種にして、専門の醫院に收めて治療すべきものなり。醫師、朝毎に來診して、事ありげに、脈搏を検し、昨夜睡眠如何と問ふ。

本論の考究は、さるかたの病理的詳説に非らず。吾等の見る所に據れば、悲哀は、治ねく認められたる事實なるのみ。隨て其生理的原因を尋ねること無からむとす。

されば吾等は悲哀を一の事實と認め、なほ細きに亘りて詩文に現はれたる一事實とす。之を單獨に考ふれば、情よりも寧ろ理に存するものゝ如く、其發生も其表彰も、人間の性行より寧ろ文辭に現はる。

悲哀いと深き詩人、即ち靈感を悲哀に仰ぎ、われどわが輓歌頌詠の色黒き醇酒に酔ひたる騷客も、おほむね、人生の饗宴に列りて、樂を俱にする好侶伴なる事は、吾等の暫々目撃する所なり。悲哀は彼等の精神的生命なりき。されど終に實在の性行には何等の感化なかりき。是等の人心平に身健けく、歡樂に就くこと亦容易にして、實際の運不運その身に落ち來る時も、悲哀は毫も爲に動さるゝ無く、却て常のまゝに、亂れず、關らずして存しぬ。偏に、これ悲哀は、その身邊に浮動する如く、彼等宛

もふたつの生を營むに似たり。

されど、この説明は難きにあらじ。見よ、藝術の人はわれどわが生を造れど、凡人は本性、習慣の隸屬にして世のわれに與ふる所に安じ、何の夢にも耽ること無し。その所謂理想は現世に於ける欲望の直接なる満足に過ぎざるなり。詩人に至ては大に然らず、彼は萬物の極なく現實にし難き幸福に向て集冲する別天地を想像し、自ら特殊の世界を創作す。隨て其藝術は不斷に呼吸する大氣の如く、見聞欲望の對象と變りぬ。新なる干繫は自己と萬有との間に生せしなり。理解、想像、感覺の法亦自ら改まらざるべからず。其心は幾多の神秘なる象徴を以て充され、奇異を望み、空想の天地に憧がるゝに至らむ。されば眞の安心立命を得むと欲せば、翼を放ちて人生有限の境外に逸し去らずむばあら

ねど、——噫、之を試みて多くは粉碎し終ぬ可し。詩人の悲哀是に於て起りぬ。

故に曰く、悲哀とは詩人自らの造りたる別天地に於て、其情緒、其理性、其表彰を支配する關係若しくは法則を指せる也と。而してこれに伴隨する結果は極めて簡明なり。先づ第一に悲哀の人は少數なり、詩人は少數なれば。第二、悲哀は心情の俊秀を示して、尊貴の章なり。またおもふ、悲哀は極めて珍らしき情想なれば、人類一般の危険を來たすことも無かる可く、從て道德論者の杞憂を煩はすに足らざらむ。

古より數多の分疏家は悲哀の爲に辯じ、百代の詩人亦爲に歌ひぬ。げに悲哀は人間自然の感情なればにや、いづれの大思想の根底にも横は

るこそ著しけれ。神を思ひ、運命を思ひ、當來を思ひ、或は人知らぬ彼岸の幽玄を議り、あるは、われらの愛せし者、われらに愛せしものを、死のあなまで慕ひわたり、昨日もけふも、入日かぐるひ、夜ぞ時得顔なる星月夜のたゝすまひ、又は大海に白帆の沈むを送り、現の眺をこぼて、フロリダ、アゾルズの瑰麗を忍ぶなど、凡べて、悲哀をほかにして、はた、何の想を催すべき。かくて是等の事、曆數さだかならぬ萬古の世より行はれ來りぬ。

または外界の瞻望より放れて、内心の反省に移らむか。こゝにも人生の經驗漸く積みゆくまゝに、憐れの衆生は良心の明鏡に己が影を觀るとき、れぞまじや、その傍ら、道心の幻、みるゝ不徳、喪心、輕浮、失敗、疑惑に變りぬ。この時、何の想かある、悲哀をほかにして。



悲哀の世と共に古るきを證さじと欲せば、何れの世にも聖者、僧侶、預言者ありきといふのみにて可なり。

かのシフトオブリヤンが不可説の情緒と名けしもの、畢竟するにだゝこの悲哀のみ、基督教の精神に全一章を捧げて論じぬ。

一國民の文化、高等の程に達するに従ひ、この不可説の情緒また増進す。これ文明に伴ふ不幸なる結果なり。幾多適切の證例、人間及びその感情を詳説せる書籍は、經驗を歷ずして人を聴ならしむ。享樂未だ盡きずして、醜悟既に來り、幻惑夙に散じて、欲望残りぬ。想像は豊に富みて瑰麗の極をきはめむとすれど、人生の貧しく虚ろにして奇なきを如何にせむ。心溢るゝ如し而も其栖む世は空なり。人間

未だ生きざるにすべてよりも生き残りぬ。

現代不平の特調はこれなり。後るゝこと半世紀トリスタン、コルビエルの句に餘響を聞く、

未だ來なく、戻りきて

シフトオブリヤンの言を、さはいへど、精しく分拆すれば、稍皮相の見あるを覺ゆ。彼曰はずや、悲哀は情熱の發達に先ち、唯青春の徒に見る可しと。されど悲哀は齡知らぬ心靈の状態なり。ひとたび其指を額に覺ゆし者世を終ふるまで痕を失ふ無し。愁の習は性とならむ。「墓のあなたの記」を物して著者自らも老人に於ける憂愁の一例たり。

シフトオブリヤン再び次の言に誤てり。

此内心の憂愁、譬へていは、まだ醗酵のまなかなる情熱の酸味は古  
代人の曾て知らざりし所なり。希臘の人、羅馬の民、現世を越えて眼  
を放たず、今世の歡樂よりもなほ完たきそれを夢想せず、其宗教の性  
質上、冥想恍惚の念自ら生ずる事なかりき。今日は大に然らず、吾等  
の願望に適合せる基督教は絶えず、地上の愁、天國の歡を標榜し、かく  
するが爲に今の憂、遠き望の泉を作り、底知らぬ夢見心地の源をなし  
ぬ。

初代基督教徒の関みしたる迫害は、人生に對する厭惡の情を強うせ  
り。されば精舎僧院の類よもに起りて、世が誑ける薄倖の兒を蔽ひ  
あるは深情のむとく傷けらるゝ危険を冒さむより寧ろ物の哀知ら  
ずして殘らむと勤めたる幾萬多恨の心を隠しぬ。されど頼むべき  
寺院少し、精舎に半生を閉ぢむとする勇猛の道念欠けたり、己むなく

奮心の徒は社會の濁浪に孤立せざるべからず。世既に厭はし、宗教  
は恐怖を起しぬ。彼等すなはち世と共に移らずして而も世に止め  
り。

結で曰く基督教は悲哀の原因なりと。

當らざる哉、この言。 シフトオブリヤンが護法論にして若し黨派心の爲  
に眩惑せらるゝこと無かりせば、彼は先づ印度の宗徒を想起すべかり  
し也。婆羅門の徒また基督のそれと同じく濁世厭離の説を唱ふ、從て  
相似の情想に達せしならむ。再び借問す、傳説の示す諸のうち、敗れて  
縛められし プロメテウスばかり、抑へ忍びたる悲運命の極みなき恨の  
適例ありやなしや。あるは ニオベに勝る憂暗の姿、いづこにある。英  
雄のうちまた オレステスあり。「憂悲を海より海へと曳きぬ」。また

うら若草の寡婦 アンドロマケエ は此世を流涕の地と眺め グリセエス 海濤に怨を訴ふ。人知らずや、古人の想を、恨長く調清らなる瓊瑤高歌の聲は白鶴の身を終ふるそれなりけり。

かくて悲哀は人情の極みにして、人類と共に起りぬ。善い哉、ルコント、ドゥリイル。彼は カイン をしも苦患に咀はれたる者の範型と爲せり。

疑もなく悲哀の最も鋭く感ぜざるは、文化極みに達し、人心の疲弊したる時なり。されど雅典も羅馬も嘗て此期を閲しぬ。歴々として ルクレティウス、オキデウス に徴す可し。相似の社會状態は相似の抒情的表彰を生ず。

これを總ふるに、悲哀こそ眞の詩の源泉なれ。眞の詩とは何ぞ。曰く

かの「あなた」の詩なり、哲學の理わる所に夢みる詩なり。而して悲哀は高材聰明の士が有する特殊の達觀にして、この實在の現まはの上に藝術の兒を獨り占むる別乾坤を創作するもの也。

佛蘭西十九世紀の騷人が述作悲哀の詩歌數種を驗みさむ。始めてこの調を彈せしは、疑もなく散文の作家なれども、これに恒久の表彰を與へたる者實に詩家の間に求むべし、即ち ジャン・ジャンク Jean Jacques シャトオ ブリヤン Chateaubriand ドマスタエル 夫人 Madame de Staël スナンクウル Senancourt の後を承けて ラマルティイヌ Lamartine 出づ。

律は平に、歩は軽く、殆ど俗謡の調を忍ばしむる姿もて、アルプス 絶景のうち、連山の麓湖上、倒影の傍、星眸の色、風景の清怨を映じて悲哀は辿り

來りぬ。ラマルティイヌの悲哀は、神興を自然に仰げり。これぞやがて其特調なる。風聲秋色、黄昏の界、絶えず其嗟嘆を催し、烟霞の愁、常にその悲を誘ひぬ。Le Lac, Ischia, Milly, Biennassis を繙きし人は知らむ、眺めやるまゝにも、悲の面帕落し來て眼を遮るを。半生の詩卷に響くもの、實に權の音の落ちては上がり、わがりては落つる單調の律ならずや。ラマルティイヌの思想、識説は、基督教徒のそれにして、聖アウグスティヌス、彌兒敦のはた、約百のそれなり。聖經に所謂「涙の谷」は、意深く、情濃やかなる詞なるを、彼こゝに基て、長篇の註疏を試みしもの、即ち其作詩なり。千七百九十三年の汎濫に覆り、溺死の人のすなる如く、蒼天一瞥を得て、哀願の手を捧げしは、この詩人を育みし特殊の社會なりき。彼詩神を説かず、琵琶を呼ばず、たゞ琴をいふ、眞に肯綮に中れり。

神を阻み、藝演の聲なく、絶望の暴語なし、たゞ命に歸するを説く。

Qu'est-ce donc que les jours pour valoir qu'on les pleure ?

Un soleil ; un soleil ; une heure et puis une heure.

L'heure qui vient ressemble à celle qui s'enfuit ;

Ce qu'une nous apporte une autre nous l'enlève :

Travail, repos, douleur et quelquefois un rêve,

Voilà le jour ; puis vient la nuit.

Qu'il pleure celui dont les mains acharnées

S'attachent comme un lierre aux débris des années.

かゝる靜平の調をもて、十九世紀智徳の合奏は起りぬ。關干の涙を零し、啼嘘の忍音を洩し、もの實にラマルティイヌを祖と爲せども、その哭するや、自ら常に中庸の度を守りて、謹慎の趣ありしを、其聲のやがて絶

叫となり、玉涙やをら切齒と變じ、倦厭の態度終に脅迫の扼腕に譲らむ  
とは、ラマルテ、イヌよりルコント、ドモ、リイルまで、何等の懸隔ぞ。

ねほかたは、専ら評家と數へられて、人のいふこと稀なる詩人は、かのセ  
ントブウヴ Sainte-Benve なり。而も詩賦の作、亦一種の特趣ありて、輕さ  
べからず。慎ましく、著るからず、殆ど平板の譏を招げど、鋭く深き憂愁  
の情自ら彷彿たり。下詩以て證とするに足る。

Et, tout rêvant ainsi, pauvre rêveur, voilà

Que soudain loin, bien loin, mon âme s'envola

Et d'objets en objets dans sa course inconstante

Se prit au longs discours que feu ma bonne tante

Me tenait tout enfant durant nos soirs d'hiver

Dans ma ville natale à Boulogne-sur-Mer.  
Elle m'y racontait souvent, pour me distraire,  
Son enfance et les jeux de mon père, son frère  
Que je n'ai pas connu, car je naquis en deuil.

\* \* \* \* \*

De mon antique aïeul je savais le ménage,  
Le manoir, son aspect et tout le voisinage;  
La rivière coulait à cent pas près du sauil.  
Douze enfants (tous sont morts!) entouraient le fauteuil;  
Et je disais les noms de chaque jeune fille,  
Du curé, du notaire, ami de famille,  
Pieux hommes de bien dont j'ai rêvé les traits,

Morts pourtant sans savoir si jamais je naîtrais.

Et bientôt, au sortir de ces songes flottants,

Je me sentis pleurer et j'admirei longtemps

Que de ces hommes morts, de ces choses vieilles,

De ces traditions par hasard recueillies,

Moi, si jeune et d'hier inconnu des lieux,

Je susse détails, seul peut-être sur terre.....

この詩微かに村夫子の風あれども、茲に述ぶる情緒は、眞摯にして生動す。静平なる家庭の悲愁夢よりも淡く、嘆きては慰む幽思、また幽思、安を舊夢の裡に求むるか。

ラマルティエが抒情の詩神は、その歩むに當て、華麗なる自然の風光を

要せしも、セント、ブウヅに至りて、よろづ静寧に、譬へば爐邊の心地よき如し。後コッペエあり、喜でこの傳燈を繼がむと試むれど、彫心鏤骨の弊は眞情の空虚を來しぬ。セント、ブウヅの悲哀は、婉美静平の後に潜みて終に疑ふべからず、蓋しコッペエと同日の論にあらじ。

上段抄録の詩句に據れば、セント、ブウヅ、この *Consolations* を作りし時に當て、殆ど教門聖徒の信を持せしが如し。十九世紀の多數人と同じく、此人も一旦は、懷疑哲學の科程を閱歴したれど、文藝の述作を試みそめしは、一加特力教徒としてなりき。その系統を尋ねれば、シットオブリヤンスナクウルのあたりを求むべく、而も哀傷の藤衣を提げて、自家の感情に被らしむるを特趣とす。されど熱烈の氣魄、先人に及ばず、またはハイロンの響に倣ひて、喪祭の緇帳、哀悼の黒羽を用ゐざりき。ひと

へに謙讓退嬰の不信を以て自家の見とし細心なるが故に獨居を恐れ、  
内顧を好みぬ。猜忌嫉妬の念をりからは此人にも有り得べけれど歌  
ひて詩の高潮に達すれば常に唯うら悲し。

*Aimer, prier, chanter, voilà toute ma vie,*

これラマルタイエの句に非らずや。而も世を同うして、アルフレット、  
ドッ井ニイ Alfred de Vigny が觀相の總括あり。

*Aimer, prier, pleurer, est également lâche.*

*Fais énergiquement ta longue et lourde tâche*

*Dans la voie où le sort a voulu t'appeler,*

*Puis après, comme moi, souffre et meurs sans parler.*

始て茲に自尊の悲哀に抗するを見る。あてに心あがりして、冷刻の極

を盡せるドッ井ニイの誇は、怨嗟の一聲をだに洩すこと無かりき。彼は  
世に敗れぬ。しかも不動の一念を鼓して緘黙を守りぬ。その哲學は  
眩惑より長らへし人の識見にして、待ちて黙せよを口號とす。

*S'il est vrai qu'au jardin sacré des Ecritures*

*Le Fils de l'homme ait dit ce qu'on voit rapporté,*

*Muet, aveugle et sourd au cri des créatures,*

*Si le ciel nous laissa comme un monde avorté,*

*Le juste opposera le dédain à l'absence*

*Et ne répondra plus que par un froid silence*

*Au silence éternel de la Divinité.*

茲に復天を挑む者あるを見る。ドッ井ニイの先進は舊教に何等の攻撃

を試むるなかりき。假令二三懷疑の徒、或は不信の傾向ありしも、暗澹たる思想の奔流を催し、はゞ甚しからざりしを、是に至りてか、基督そのものは直接の論題に上りぬ。

*Marche à travers les champs une fleur à la main*——

かくの如く、此詩人は自然の廣大に個人を没するを以て、憂愁の一療劑と獎むれども、詮するに、彼も亦宿命論者のひとり、定數の終に避け難きを信ず。

*Notre mot éternel est-il : c'était écrit ?*

*Sur le livre de Dieu, dit l'orient esclave,*

*Et l'occident répond ; Sur le livre du Christ.*

これぞ思想の支柱なる。教門の法式は異ならむ、而も一文、凡派に通ず。

彼の詩、醇雅明朗、而も全篇を貫くに此中心想を以てす。さればド、井ニイの悲哀は、一種尊貴の風を帯びて、宛も邊疆の轉戦より歸りし峻厲の武夫が、人生の瑣事に介して、自ら靜逸の姿あるに似たり。

*ド、井ニイ* de Musset に至ては大に然らず。齡なほ壯く、年小卓犖の眞摯を具ふ。さのふ生れし老人の風を以て自ら居れど、秀麗の風格、青春の神に似たるを如何せむ。世を終ふるまで放膽の虚榮に酔ひて、絶えず自家の情のみを歌へり。卑野ならぬども、局肅にして、表に矛盾多く根蒂に論理を欠き、過失薄徳の果なればにや、不知不識の間、彼は人間といふ動物の活模型なりき。まことに興多く面白き動物ぞ、而も終に動物たるを免れず。情感を支配すべき大智力の資、彼の有にあらねば、不信敗亡の徒間にありて、達人が未だ掲げなす光榮の豪語かの「哲學」とい



ふものゝ一片だに無きぞ悲しき。かれが藝術の理想また静冽にあらず、雄健にあらず。

ドミッシュセエの戀はれるかし。されど、めでたき歌をもて其恨を泣きぬ。彼の愛は何人も愛ふる所されど、微妙じきは其欺にして強ひて壯大の調を望まざるに、自ら詩風の高俊に達しぬ。而して其哲學系統は何の論斷も無き絶對の疑惑なり。信仰の人にあらず、自然神教の徒にあらず、將また無神論者にあらず、單なる修辭の語葉として神の名を用ゐたり。Espoir en Dieu, Lettre à Lamartine の詩は宗教觀の表白を含みたれど、條理明晰にして、たけ高きかゝる語葉は彼が如き詩人の力に餘れり。

Pepu, quand le soir tu t'inclines

A genoux pour prier Dieu,

かゝる歌に至りては感興全く撰を畧にし、終に真情の露出せるを認む。然りと雖も、彼も亦文藝の一異彩なる哉。人或は彼を貶して、バイロンの餘響といふ。この難や寧ろ嗤ふべからむ。自家の盃を外にして彼は飲まざりき。たどへ其底の淺きは否み難けれど。

謂ふに此人は詩嶽に悠遊する輕びやかなの才人に過ぎず。親しく詩神と交りて、時に靈興を仰ぐことあれども、ラマルティエヌと同じく詩よりも捉へ易き實事を樂むの傍ら、閑を待て詩神と戯むるゝなりけり。その時にこそ流涕號哭の聲を大にし、神を難じ、宇宙を罵り、我を怒りて、例の自刃など呼はれど、實はたゞ口頭の空言に過ぎず。

Si deux noms se mêlent sur ma lyre

Oe ne sera jamais que Ninette ou Ninon.

まことや、此二嬌名は金髪の二連を交ふる如し。詩人乃ちその芳香をかき柔肌にくちづけし折からの徒然には、雲髪の数をも讀まむ。かくて倦怠の念やうやく生ずるに至て、耶和華、イエスの聖名を雜ゆるを常とす。

進で、ポドレエル Bundelaire を説かむか。現代の悲哀は茲に其病的發展を遂げたり。一見して人或は云はむ、悲哀こゝに名を變じて鬱悶と改めしのみと。再考して終に其全く變質せるを曉らむ。ポドレエルは悲哀に誇れり、之を詩章の龍蓋帳下に据ゑて、黒衣聖母の觀わらしめ、絢爛の幻想、彫塑の夢思を恣にして、生動の氣を興ふ。宛も絶美なる獅身女頭獸なり。悲愁を愛するの甚しきは、先人の誰も、えせざりし所、これが詩趣を讚美して、自ら、悲哀の煉金道士と號せり。

Hermès inconnu qui m'assistes,  
Et qui toujours m'intimidas,  
Je me rends l'égal de Midas,  
Le plus triste des Alchimistes

Par toi je change l'or en fer,  
Et le paradis en enfer,  
Dans le snaire des nuages

Je découvrir un cadavre cher,  
Et sur les célestes rivages  
Je bâtis de grands sarcophages.

悲哀の疾、既に膏盲に入りぬる詩人にして、始めて、斯る瑰麗の憂愁を夢  
み得可く

Cieux déchirés comme des grèves,

En vous se mire mon orgueil !

Vos vastes nuages en deuil

Sont les corbillards de mes rêves,

Et vos lueurs sont les reflets

*De l'enfer où mon cœur se plaint.*

の語を發し可し。これらの詩敢て疑を容るべからず。地獄と名づけしわが憂愁を、ポドレエルは憶がる、まで戀ひわたりぬ。眞になほこれが爲に、煩悶呻吟して、完たき克己の域に達したりと雖も、それはかゝ

る悲戀必然の結果なるのみ、しかすがに、此人の呵責には、先人に曾てなき鮮血の淋漓たるを見る。是に至て身體の疾、終に作詩の上に顯れつ。

先人 シアト オブリヤン、スナ クウル、ラマル テイヌ、セント、ブウヴ、ドッ、井

ニイの徒は惱み心地さだかならぬまゝに、自然に對する心中の愁訴を自然そのものに捧げて、よのつねの失意にのみ泣けども、ポドレエルに至ては然らず。かれ都府の子なり、乃ち巴里叫喊地獄の詩人として胸奥の悲を述べ、人に叛き世に抗する數奇の放浪兒が爲に、大聲を假したり。その心夜に似て暗懨、いひしらす汚れにたれど、また一種の美、たどへば濁江の底なる眼、哀憐悔恨の凄光を放つが如きなきにしもあらず。

ポドレエルに及で、情緒の及、一段の銳利を加へ、その技巧亦文藝の憂愁

に一新發足點を興へたり。燦爛たる秀句麗章は暗黒の大輪新に昇れる如く、之に加ふるに彼は故ら悲哀を求めむとして、刺激の毒劑を用ゐたる佛文士の卒先者なりき。常に阿片の快樂を思ひて其反應をド、クインゼの書に究む。されど夢幻の境に心身を自失せしめむと計りて、其自ら服用せしものは阿片の癮毒に非らずして世の常の葡萄酒なりけり。

Aujourd'hui l'espace est splendide :

Sans mors, sans éperons, sans frein

Partons à cheval sur le vin

Pour un ciel féerique et divin !

乃ち忽然として醜麗なる新生を作りぬ。斯る生活の景情は Le Rêve

Parisien に 雜し、La Beauté の歌にはその宗教を告白して自家の目的を述べ。

O mort, vieux capitain, il est temps ! levons l'ancre !

Ce pays nous ennuit, ô mort ! Appareillons !

Si le ciel et la mer sont noirs comme de l'encre,

Nos cœurs que tu connais sont remplis de rayons,

Verse nous ton poison pour qu'il nous reconforte !

Nous voulons, tant ce feu nous brûle le cerveau,

Plonger au fond du gouffre, Enfer ou Ciel, qu'importe !

Au foin de l'Inconnu, pour trouver du Nouveau.

斯の如きはポドレエルの心なり。夢幻不可能の愛に沈溺して、樂欲の焰をわれど己が神秘の性に求めたる瘦驅累々の姿なるを、なほも心情の呵責に我を捧げて已まず、げに狂疾の人に酷似するの甚しきは、人をして本論中に彼を説くの適否を疑はしむるばかりなり。されど讀者幸にわが下せる悲哀の定義を記憶せば、彼を茲に論ずるの當れるを知らじ。彼を近世詩家の間に位せしむる所以のものは、ひとしく假設の悲哀なればなり。たゞ其夢幻、別人と異なるは、狂暴熱烈を極めて、殆ど夢魔の觀あるのみぞ。彼は常に自らが悲哀の草をにれがみぬ。

をりふしは、稍々靜平の時なきにあらず。跪きて祈る熱意の教徒は、この悶の兒にも含まれたり。要するにこの謙讓なる忍辱の姿こそ、眞のポドレエルに非らざらめや。

Soyez béni mon Dieu, qui donne la souffrance,  
Donne un divin, remède à nos impuretés,  
Et comme la meilleure et la plus pure essence  
Qui prépare les forts aux saintes voluptés !

Je sais que vous gardez une place au poète  
Dans les rangs bienheureux des saintes Légions,  
Et que vous l'invitez à l'éternelle fête  
Des Trônes, des Vertus et des Dominations !

木代澆季の騷人と同じく、ポドレエルの複雑なる心は、自然神教、惡魔教の神秘なる兩極に引かれたり。暫くも心の平なく、未知の境に投せむ

として、わが身の悲愁を厭ふ餘は、無限の温順敬虔の忍辱に、解脱の道を求めむかと思ひ、又翻て無常の大海に、物狂はしき瓢遊を試みむと感ふ。

吾等實はポドレエルより、一步を進めて、實際の結果を收め得るなり。即ち憂愁を甘受し、苦痛を常軌とし、意志を以て苦惱を増進整理する一具たらしむるを得。人、自我と戦ふに當り、最後の手段は、かの世の常の療法にして、最終の勢援なる狂疾なるのみ、かくすれば、人間の恐しき内心劇も終らむ。自然と戦ひ、神に抗する要なく、自我を憎惡の目的物として、之を苦め、殺すに完全なる自覺、充分なる故意を以てするを得べし。かもふに病的心理學最後の發達は苦惱を欲望の目的とするに至て已まむ。この時自尊の心満足す、勝利完ければなり。

ルコント、ド、リイル *Leconte de Lisle* の出づるや、哲學に基ける厭世觀は佛

蘭西の詩文に致死のたれぎぬを投げたり。前人の詩歌多く一時の感慨を洩らし、單なる悲哀の想を鼓吹するに止りしかど、この詩人に至り始めて、悲哀は一種の系統を樹て、藝術の莊嚴を帶ぶ。評家久しく彼を目するに、高踏派の盟主を以てす。即ち格調定かならぬ *ド、ミ、ユ、セ、エ、ラ、マルテイス* の後に出で、始めて詩神の雲髪を捉みて、之に峻嚴なる詩法の金櫛を加へたる者なりとす。彼常に「痛なし」と稱せらる。世人稍もすれば之を誤解して曰く、高踏一派のともがら甘じて感情を犠牲とす。これ既に藝術の第一義を没したるもの、終に述作なきに至らむかど。あらず、あらず、この暫々濫用せらるゝ「痛なし」といふ語業を、文藝の意味より解すれば、單に近世派の態度を示せるものに過ぎず、常に宇宙の深遠なる悲愁、神秘なる歡樂を覺ゆるものから、當代のねるかしき歌物語が、野卑陳套の曲を繰返して、譬へば情痴の涙に重き百葉の輕舟、今の藝

術の小河を塞ぐるを敬はざる也。尋常世態の瑣事奚ぞよく高踏派を動さむ。されど之を倫理の方面より観むか、この派の詩人が人生に對する態度とこれより學ばむとする教訓とはこの一語に現れたり。曰く哀樂は感ずべく、歌ふべし而も人はストイシアンStoicの心をもて忍ばざる可からずと。かの額物思はしげに、長髪わざとらしき幾多の詩人もこの「痛なし」といふ一語の爲に辟易せしも多かり。

されば、ルコント、ド、リイルは、文藝の上に劃然たる新機軸を出し、者にして、同代の誰れよりも、其詩哲理を含み、譬喩の趣に富む。Cain, Satanの詩どもに人界の災殃を賦し、Hypatieは古代教衰頹の晚唐美、Oyilleは新しき信仰を歌へり。非クトル、ユウゴオが歴史の壯大なる景像を擴げて、臺閣の風ある雄健の筆を振ひ、史乘逸話のうへに叙情詩めいたる豊麗を興へたる傍ら、ルコント、ド、リイルは傳説に、史蹟に、内部の精神的

意義を求めき。かの傳奇の老大家は物語めいたる紫雲の燦爛を曳き、この憂愁の達人はその質跡を闡明す。

かくて此所謂内部の意義は、いつも酸苦の極を盡せど、これは皆詩想の假托にあらで、確たる哲理の信に基けり。ルコント、ド、リイルの専ら歌ひし題材は、人智の哲學に非らずして、宗教と哲學系統との干繋なりき。諸の宗教は、それぞれの哲學系統に變じ得べく、諸の哲學系統も亦宗教に變ずるを得可しとは、シャペンハウエルShopenhauerの言ならずや。而して世人おほむね哲學を棄て、宗教を採るは、勢の然らしむる所なれど、ルコント、ド、リイルは却て哲學を擇びぬ。讀者の眼頭に彷彿として展開するものは、豪壯悲愁なる北歐思想、明暢清朗なる希臘田野の夢、または銀光の朧々たること其十字架を思はしむる基督教の冥想、特に印度大幻夢、涅槃

禁の妙説なりけり。一代の傑著 *Poemes Barbares* に重要な地位を占むるは終の思想なり。

黒檀の森茂きこの世の涯の老國より來て、彼はどこしへの座を吾等の傍に占めつ。教へて曰く

Réjoins-toi, mon fils! Rien qu'il soit vain de rire

Où de pleurer, et vain d'aimer ou de maudire.

Tu vas sortir, par l'expiation,

Du monde obscur des sens et la passion,

Et franchir, jeune encor, la porte de lumière,

Par où tu plongeras dans l'espace première,

La vie est comme l'onde où tombe un corps pesant :

Un cercle étroit s'y forme et va s'élargissant

Et disparaît enfin dans sa grandeur sans terme

La Maya te séduit; mais si ton cœur est fermé,

Tu verras s'envoler comme un peu de vapeur

La colère et l'amour, le désir et la peur;

Et le monde illusoire aux formes innombrables

S'écrasera sous toi comme un morceau de sables

一度ならず繰返したる大智識の教話に、分類結晶したる悲哀は、静寧の姿を得たるも、なほをりふしは憤怒の激發に雷電の轟然たるを聞く。

Je te tairai, ô voix sinistre des vivants!

斯の如くにして電火ひらめき萬雷はためき、人類に對する痛罵起りて、憤は藥錠の爆發する如く、理論に所謂無痛墻壁を破り終ぬ。



自家の理論を詩文に發表してシヤモンハウエルの哲理に證せられたる  
佛法教理を展開したるは、この詩人の特色となすべくや。儕輩の詩人、  
皆多少憂愁の思想を具へたれど、厭世觀の理義彼に於ける如く整然た  
るは稀なり。衆人徒に虚無を讚す、彼は明に事實を示しぬ。その詩は  
智の詩なり、而もなほ詩趣饒にして、坐にペラスゴイ、キョクロブスの城を  
忍ばしむる堅牢の石壁は、纖弱の律に歌はれて、往々俗謠に傾ける當代  
傳奇の宮殿を摧かむとす。また詩法の高峻を加ふると共にラマルテ  
イヌ、セント、ブウウ、ド、ミ、セエに見えたる糺糊たる悲哀の觀も、やうや  
う高堤の間を流れて、明らけく、紛ふかたなく、改め難き厭世の思想とな  
りぬ。

佛蘭西最近の哀觀詩人、トリスタン、コルビエール *Tristan Corbière* シウルラ  
フアルツ Jules Inforgues は既に没せし人のみを擧ぐれば、鬱憂の情緒に銳  
利の刃を加へたり。大膽なる詩律の革新を道破して、微妙じき成效あ  
りしと共に、根本の愁思を冷諷の文字に行りぬ。されば其最も詫しき  
歌を貫きて、怪しき歡、うれたき戯の走れるを覺ゆ。冷刻、人に秀れたる  
涙の詩を、佛蘭西詩文に輸入したるは彼等なり。嬉遊の聲、却て人の感  
を害し、終は常に啼嘘嗚咽を以てす。格律の矛盾多く、無數の對句疊り、  
滑稽誇張の辭句に充ちて、折節は恐しき擬詩を交へ、鬼氣人を襲ふ默劇  
に終り、沈痛の多恨、凄蒼の滑稽、狂亂の態度、絶望の擧手、投足をも混じた  
り。諧謔叫喚に破れ、呻吟歡呼に終り、傀儡物狂はしく發かれたる墓前  
に踏舞して、常は快活の横笛、輓歌の調を嘯く混沌の雜塊なり。而して  
黒衣の大弄臣、棺車の燭をかざしたりとは、實にこれら詩人の謂なる乎。

齊しくブルターニュの生れふたりながら都城の生活に投じぬ。コルビ  
エル句あり。

Ce fut un vrai poète : il n'avait pas de chant

Mort, il aimait le jour et dédaigna de geindre.

Peintre : il aimait son art — il oublia de peindre.

Il voyait trop — et voir est un aveuglement.

— Songe creux : bien profond il resta dans son rêve,

Sans lui donner la forme en baudruche qui crève,

Sans ouvrir le bonhomme, et se chercher dedans.

— Pur héros de roman : il adorait la brune  
Sans voir s'elle était blonde.... Il adorait la lune,  
Mais il n'aima jamais — il n'avait pas le temps.

— Chercheur infatigable : ici-bas où l'on rame

Il regardait ramer du haut de sa grande âme

Fatigué de pitié pour ceux qui ramaient bien.

絶望の聲何爲ぞしかく切にして急なる將何爲ぞかくも甲斐なき。こ  
ぐ人の憐につかれてと實にや物とみな合はず萬物を擁して終に何物  
をも生せざる此恒心なき詩人はわれとわが心を噛み食ひぬ。かれ常  
になべての平凡を厭ふ。されば其結果なる跛足の失敗は凡により凡

に於て凡なるを庶幾すべくもあらじ。  
儕輩と異なるコルビエルの特質は一種抑ふ可からざる品性の執拗なり。かれ常に銜を噛み跳りて己ます。

Mon cœur piaffe de génie

とはラフォルグよりも此人に適したる評ならむ。憤怒の迸發、憎惡の厲聲、哲理教法の間を、頸も碎かむばかりなる奔馳、否定の暗穴より發したる敬虔狂熱の絶叫すなはち其歌の特趣なるべし。

十七百

權衡を知らずゆくりなき冒險を喜び、雜駁を嗜む趣味あるに於て、ラフォルグはコルビエルと旗幟を同うすれど、たゞ、しかく狂暴の亂なし。天性や、巫蠱の俤あれど思想の深遠なるを珍とす。心を獨逸の理想説に没してカント、フイヒテの遒勁莊嚴なる學説を味へり。詩風や、蕪雜

にして彫鏤の痕なく所謂一氣呵成の趣あるが爲めに哲學のこちたき術語を詩歌に挿みて甚しく人耳を聳動せざりしこそ騷客群中獨得の長なりけれ。

Dernière crise. Deux semaines errabondes

En tout, sans que mon ange gardien me réponde

Dilemme à deux sentiers vers l'Éden des Élus :

Me laisser éponger mon Moi par l'Absolu ?

Ou bien exiliver l'Absolu en moi-même ?

C'est passé. J'aime tout, aimant mieux que tout m'aime.

一十七百

下詩またラフォルグの眞面目を表出して餘蘊なし。

Prométhée et Vautour, châtement et blasphème ;

Mon cœur, cancer sans cœur, se grignote lui-même  
Mon cœur est une mine où j'ai mis certains défunts.  
Oh ! ehut, refrains de leurs berceaux ! et vous, parfums.....  
Mon cœur est un lexique où cent littératures,  
Se lardent sans répit de devines ratures  
Mon cœur est un désert allègre, bien que souf  
De ce vin revomi, l'universel dégoût.  
C'est un feu d'artifice, hélas ! qu'avant la fête  
A noyé sans retour l'averse qui s'ombête  
Mon cœur est le terrestre Histoire-Colbillard  
Que traient au néant l'instinct et le hasard.

かくて何時迄もかゝる對照を列擧するが故にをやみき切齒の音わざ

となる咆哮の聲をさくの思ありて、宛も詩家が徒然の餘り終に自を厭ふに至りし如きを知らむ。其散文も亦同一の愁を含みて悲哀の奮心に照らさる。説て茲に至れば品隲の文字、漫に奇矯を銜ふに似たれど。ラフォングの如きを評するに當ては別に適はしき辭なきを如何せむ。之を要するに彼は終に療す可からず、心くねり情倦じたる一介の驕兒にして悲哀を視ること諧謔の如く、之を掌上に翻弄して得々たり。本論の題材なる悲哀の思想是に至て巴里都門の性を帯びたりと謂つ可し、而も往々巴里街巷の風を帯びて。

コルピエール、ラフォングに於て、精神の擾亂は怡然たる穉氣と共に並びぬ。抑ふべからざる佛蘭西氣質は、破壁に匂ふ野花の如く、形美しく色艶に香たとしへなし。

悲哀の傳燈は二人の後に及で已まず。たゞ人生を愛し、生命を愛する一種反動の色やうやう見初めつ。

騷人なほ數者わが短評を待たざる可からず。悲哀の詩歌は其特質ならねど、エルレエヌ Verlain マラルメ Mallarmé を謂はむか、前者はラマルライエヌ、セント、ブウヅと途を同うして、而も方向を異にし不信疑惑に起りて幼兒の如き信心に達しぬ。後者は當代の俊英なり。榮多く瑕なき藝術の生を費みて、其幻を歌ふどころ、眞價自ら貴し。ユウゴオに至ては復雜を極めて常軌の律す可きにあらねば、從て本論の範圍に入らず。  
されば茲に筆を擱かむ。われらの觀察は終に何の結論なくてやみぬ。借問す、さはいへど結論何の益ぞ。

明治三拾五年三月五日印刷  
明治三拾五年三月十八日發行

(最近海外文學編輯部付)

定價參拾八錢

郵稅六錢

著作者 上田敏

東京市日本橋區大傳馬町二丁目廿一番地

發行者 伊藤時

東京市神田區小川町一番地

印刷者 多田榮次

東京市神田區小川町一番地

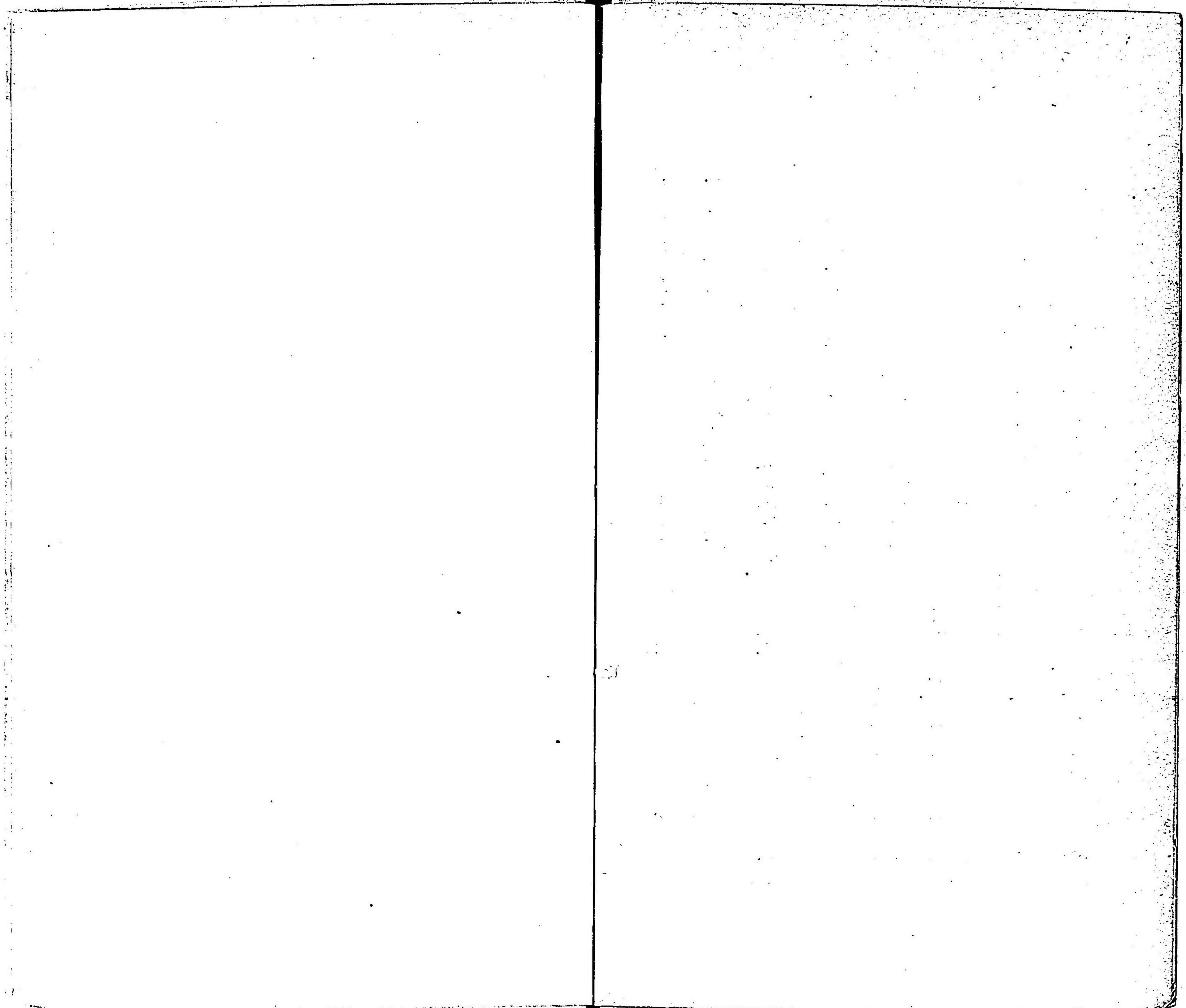
印刷所 愛善社



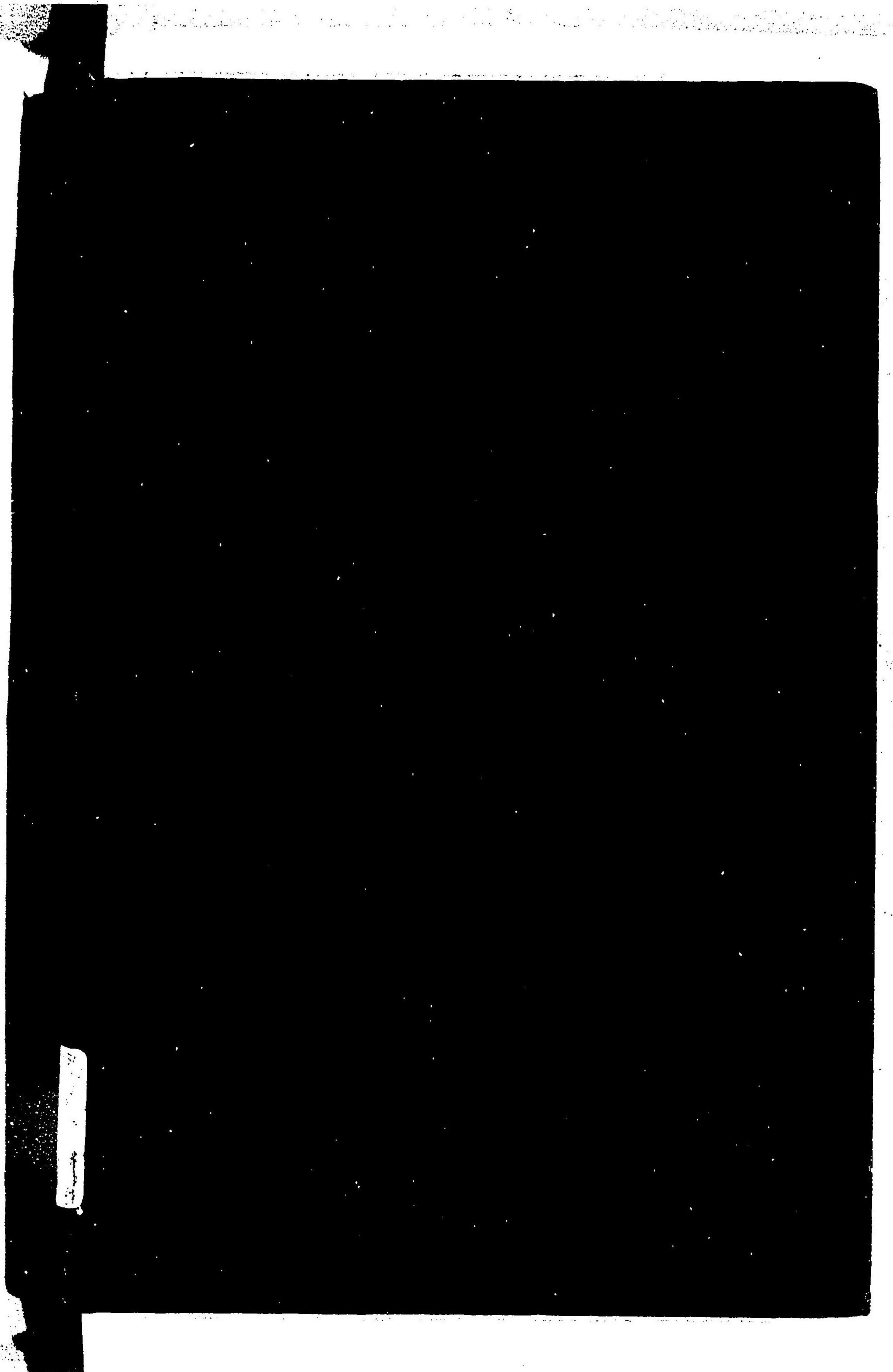
發行元  
發賣元

東京市日本橋區  
大傳馬町二丁目廿一番地  
東京市日本橋區  
橋町一丁目一番地

文友館  
松榮堂



30
191



Small, illegible text or markings located on the left edge of the black area, possibly a page number or a small label.



30

191

